

地域交流研究

年報第20号



都留文科大学地域交流研究センター

2023年度

地域交流研究

2023 年度
年報 第 20 号

目 次

— 2023 年度（令和 5 年度）活動報告 —

I. 2023 年度の活動について〔総括〕	2
II. 各部門の活動	5
II-1. 自然共生研究部門	
II-1-1. 動物の生態研究と教育・展示活動	
II-1-2. キャンパス内の絶滅危惧植物の保全活動	
II-1-3. 水文環境研究と自然に関わる市民公開講座	
II-1-4. 谷 ^や 二ラボ	
II-2. 共生教育研究部門	
II-2-1. 地域美術教育	
II-2-2. 地域インクルーシブ教育	
II-2-3. 社会教育	
II-3. まちづくり研究部門	
II-4. グローカル交流研究部門	
III. インターフェイスとメディアの活動	34
III-1. 第 19 回地域交流研究フォーラムの開催	
III-2. 各種講座の開催	
III-2-1. 都留文科大学現職教員教育講座	
III-2-2. 都留文科大学子ども公開講座	
III-3. 学部共通科目の開講	
III-3-1. 「地域交流研究Ⅰ」	
III-3-2. 「地域交流研究Ⅱ」	
III-3-3. 「地域交流研究Ⅲ」	
III-3-4. 「地域交流研究Ⅳ」	
IV. 地域貢献活動	50
IV-1. 山梨県南都留地域教育フォーラム	
IV-2. 都留市放課後子ども教室事業	
IV-3. 文大ボランティアひろば	
IV-4. 地域交流研究センターサテライト	
IV-5. 学級づくりの向上をめざす実践講座	
IV-6. 市民公開講座	
V. 地域交流研究教育プロジェクト	66
V-1. 食育つる推進プラン	
V-2. こどもフィールド・ノート	

*表紙の写真：キャンパス内に生息するカタクリ（左）とカワラナデシコ（右）
昔は里山で普通に見られたが、今は絶滅危惧植物に指定されている地域も多い

活 動 報 告

2023 年度

活動報告

2023 年度（令和 5 年度）

I. 2023（令和 5）年度の活動について【総括】

地域交流研究センター（以下、センターと記す）は、2023（令和 5）年度で発足から 21 年目を迎えた。センター発足以前から、都留文科大学では地域との交流や、学生・教職員・市民との協働によるさまざまな実践が行われてきた。さらに先人による地域における諸実践の積み重ねにより、活動に不可欠な人間関係や、じかに自然や文化に触れ学びを深めるフィールドが築かれてきた。教職支援センターに移管された SAT 事業や現在のセンターの多様諸活動もこのような地道な取組が基盤となっている。

こうした地域での継続的な取組や理念を大学として大切に受け継ぎ発展させていくために、センター発足時に確認した基本的な考え方は次の 3 点である。

- ① 大学に対する地域の要請に、本学のもつ諸資源を活かして対応し、「地域の大学」としてその役割を担っていくこと
- ② 地域性や実践性の問われる本学の研究・教育の一環として、地域（現場）に赴き、「課題」と取り組む地域の人びとと共同して活動を展開すること
- ③ これらの活動の蓄積を通して、本学も地域づくりに参加し、その一端を担うこと

こうした基本的な考え方は、現在でもセンターの各部門の活動や市民公開講座、地域貢献活動等に反映されている。またセンターが地域のあらゆる要請に対応する単なる「地域交流センター」ではなく、地域との交流のあり方を本学の研究や教育の側面から捉え直し、兼担教員の持ち味を活かした取組を通して地域での交流のあり方を研究する「地域交流研究センター」であることも確認してきた。

本学の研究・教育の特色を活かした地域貢献活動を充実させるために、センターでは、現在、「自然共生研究部門」「共生教育研究部門」「まちづくり研究部門」「グローバル交流研究部門」を設置し活動している。当センター発足時に、地域を捉える視点として「自然」「教育」「仕事と暮らし」をテーマとしたが、その基本的な視点は現在のセンター各部門の活動にも受け継がれている。

2023（令和 5）年度は、5 月に新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に移行し、それまでの事業実施上での対策や人数制限等の制約から解放されて、各事業が実施することができた一年であった。

「自然共生研究部門」では、ムササビ観察会や湧水さんぽ、星空講演会、谷村第二小学校放課後実験教室（「谷ニラボ」）のほか、新たにキャンパス内の緑地を利用した教育活動に関する研究を実施した。「フィールド・ノート」は第 114 号から 116 号までの 3 号及び特別号を発行した。特別号は、センターがアーカイブ保管する「奥隆行写真コレクション」「益子亮コレクション」から過去の都留市の風景と現在とを比較し記録したものとなっている。また、センター協力研究員である宝小学校教諭北浦貴之氏指導による同小学校「こどもフィールド・ノート」第 1 号を発行した。また、「つる地域教材研究会」の分科会である「フィー

ルド・ミュージアム研究会」の報告として、「フィールド・ミュージアム研究第2号」を発行した。

「共生教育研究部門」では、宝保育所と連携した造形表現活動、障がいなど地域のニーズのある人たちの週末の居場所づくりの活動（通称「クロボ」）、「バンカム、ツル」の2階を借り現代歌人である瀬口真司氏を迎えてのワークショップ「つるぶんカフェ」の事業などを実施した。

「まちづくり研究部門」では、富士急行線谷村町駅において放課後の子どもたちの居場所づくり「ぷらっとはうす」を毎週水曜日開催、夏休み宿題教室や文化祭、「つる子どもまつり」への出展も行った。また、富士急行・都留市と連携した観光まちづくりプロジェクトでは、都留市内に5つのサイクリングコースを企画し、マップで表現した。

「グローバル交流研究部門」では、留学生と本学学生との交流をテーマとした「ムササビ観察会」を開催し、留学生11名が参加した。

研究部門以外の事業として、木工教室や陶芸教室、石鹸づくり等の「文大子ども公開講座」を計8回開催した。大学と地域との学びを通じた交流の場となっている。特にロンドンオリンピックに出場した本学出身の佐野夢加氏による「佐野夢加かけっこ教室」は毎年好評を博している。

センターでは、地域におけるボランティアニーズの紹介や地域と学生間のマッチング事業も行っている。本学各部署・教職員に届くボランティアニーズに対して、2023（令和5）年度はセンターで一元的に受けることとし、学生に周知する体制を整えた。ボランティアニーズに対してはセンター会議で内容等について確認した後、所定の書式で学生に周知をすることとした。なお、2023（令和5）年度の学生ボランティア登録は、96名であった。また、ボランティアを通して交流できる場、「文大ボランティアひろば」を月1回、昼休みに開催した。THMC（6号館）3階のコモンズを会場に、ボランティア活動団体に活動紹介をしてもらい、学生との交流をはかった。中には読み聞かせやゴミ拾い等の実践も加わり、活動の様子をより具体的に学生に伝えられたのではないだろうか。

センターの広報については、冊子、パンフレット、SNS、ホームページといった媒体を使い、幅広い年齢層を対象にして行った。特に本学入学を希望する高校生には、センター活動や本学の魅力を伝えるために見開き4頁の「ニュースレター」を計3号発刊し、オープンキャンパスや出前授業、高校訪問等で配布した。オープンキャンパスでは、センターは「フィールド・ノート」を編集する学生がキャンパスツアーを担当し、高校生に本学の魅力を直接PRした。ツアーの途中や終了後には、高校生が大学生に大学生活について相談する光景も見られた。また、オープンキャンパスではスタンプラリーを行い、達成した高校生・家族には、手作りのムササビの缶バッジを提供、合格祈念になると好評であった。

2023（令和5）年度の「地域交流研究センターフォーラム」では、放課後デイサービス「ゆうやけ子どもクラブ！」上映会&クロストークを実施した。本学と特定非営利活動法人あかね会とをリモートで繋いで実施、74名の教職員・学生が参加した。

2023（令和5）年度は、都留市複合型居住プロジェクトにおける大学連携施設「つるフィールド・ミュージアム」の計画が進められ、2024（令和6）年度に着工を迎えることとなった。8月には設計者のプロポーザル選定が都留市により行われ、内藤廣建築設計事務所に決定した。「楽しむ」「学ぶ」「つながる」といった施設計画のポリシーは、「まちの縁側」として建

物四周を半外部化した設計となって立ち現れることとなった。

当該施設では、本学元学長・名誉教授でもある教育学者大田堯氏のコレクションも計画している。2023（令和5）年度にセンターでは氏の御家族からDVD「かすかな光へ」を譲り受けた。学内での教育研究のために活用いただきたい。

センターの運営に関し、今後の課題として以下の3点を挙げたい。

1点目は、2024（令和6）年度竣工予定の上記「つるフィールド・ミュージアム」の管理計画についてである。新施設が多世代・多文化交流拠点として機能するには、新しいプログラムや地域と連携したプログラムを展開することが可能となる施設管理運営体制を導入することが必須である。これまでの施設管理の延長に留まれば、単にセンターと家庭科室を移設しただけの施設に陥ってしまうことにつながりかねない。

2点目は、THMC（6号館）3階及び4階に設置されたラーニング・コモنزの設備の充実である。センターでは、ボランティア広場やまちづくり研究部門等で積極的に利用することに努めているが、机や椅子、ホワイトボードの数が不足し、パンフレット等にうたう「アイデアを深め、カタチにする」目的を果たすことができる空間となっていない。早急に改善を求めたい。

3点目は、センター事業に参加しやすくするための環境整備である。センターでは各教員の持ち味を活かした魅力ある事業が展開され、大学認証評価等で高い評価を受けている。本学の地域貢献活動は、兼担教員のボランティアな精神と熱意によって支えられている。「地域の大学」を掲げる本学の地域交流の現実に応じて、兼担教員や学生、職員、市民が参加できる、あるいは参加しやすい環境の整備が引き続き重要である。

2024（令和6）年度から、副専攻プログラムとして「フィールド・ミュージアム入門」「フィールド・ミュージアム研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「フィールド・ミュージアム演習Ⅰ・Ⅱ」が開始する。この副専攻では、センターが築き蓄積してきた地域での人間関係やフィールドを基礎として、知識だけでなく卒業後の人生に活かせる「生きた学び」の修得を目指している。また、地域交流研究教育プロジェクトも開始予定である。

最後に、本年度は、20名を越える教員にセンター委員として関わっていただいた。センター事業の実施に際しては、多くの学生、教職員、市民の協力を受けた。センター活動を支えていただいた全ての方々に、深くお礼を申し上げたい。

（文責：鈴木健大）

Ⅱ. 各部門の活動

Ⅱ－１．自然共生研究部門

【2023 年度（令和 5 年度）の活動概要】

2003 年の地域交流研究センター（以下「センター」と記す）が発足すると同時に一部門として位置づけられたフィールド・ミュージアム部門は、センターの再編にともない、2019 年度、「自然共生研究部門」と改称した。自然共生研究部門としての活動は 5 年目となる。センターは発足以前から、地域を博物館に見立て地域での事象や活動にじかに触れることで、機械的な暗記とは異なる「生きた学び」、つまり知識や技能を生活の中で活かすことができる学びを体験するという大田堯元学長による「都留自然博物館」や今泉吉晴本学名誉教授による「都留フィールド・ミュージアム」が構想されてきた。こうしたセンター発足以前の構想や諸実践、2003 年以降の取組を受け継ぎながら「自然共生研究部門」では活動をしてきた。2023 年度はこの部門を、別宮有紀子（学校教育学科教授）、内山美恵子（学校教育学科教授）、山森美穂（学校教育学科教授）、福島万紀（地域社会学科准教授）、北垣憲仁（地域交流研究センター教授）が担当した。

自然共生研究部門では、教員の専門領域を超えた協働というセンターの特徴を活かし、「地域の自然と暮らし」をテーマに次のような活動に取り組んでいる。

- ・ 調査と研究
 - ①動物の生態研究
 - ②水文（すいもん）環境（水循環など）の研究
 - ③地域の農林業の持続に関する研究
 - ④自然と文化の保全活動
- ・ 収集と保管
 - ①地域の自然・文化資料の収集と保管
- ・ 教育と公開
 - ①自然観察会（ムササビ観察会、湧水観察など）
 - ②キャンパスの緑化活動
 - ②出前講座・公開講座・放課後実験教室
 - ④展示
 - ⑤出版（機関誌『フィールド・ノート』の発行など）

本年報では、2023 年度に取り組んだ事業について担当者ごとに報告する。

Ⅱ－１－１．動物の生態研究と教育・展示活動

1. 2023 年度の活動概要

「フィールド・ミュージアム部門」の活動を受け継ぎ、地域の動物の生態研究を基盤に、①自然との共生のあり方を市民との交流事業を通して探ること②学生と市民との交流により地域の自然や文化を記録し保存し発信すること、を活動のおもな目的としている。2023 年度は、新型コロナウイルス感染症が 5 類という位置づけになったが、活動内容や室内の使用

などはこれまで通り本学の感染症対策ガイドラインに従って対策を講じながら慎重に活動を実施した。以下にその活動内容を報告する。

2. 活動の状況

(1) 機関誌『フィールド・ノート』の編集と発行

学生が主体となり編集・発行する冊子『フィールド・ノート』を年3号発行した。従来は、年4号を発行していたため、今年度は年4号の発行を計画した。この冊子編集は、地域交流研究センターの機関誌に位置づけられている活動で、2002年に創刊し2018年に第100号発行を迎えた。2023年度も学科・学年の枠をこえて16名の学生がこの冊子編集作業に参加した。

参加する学生は、自ら記事の企画をたて、実際に地域に出て観察や取材をし、記事を書き、レイアウト、入稿など一連の編集作業を行なう。毎週定期的に行われる編集会議（平日の6時限に設定）でそれぞれの記事を校正しあい、課題を解決しながら冊子を完成させる。地域はもとより全国からの購読の要望があるため、2023年度は各号1000部を発行し、本学の教職員、学生、市民、全国の希望する読者に届けている。

2023年度の発行状況は次の通りである。

114号：2023年7月発行、3,500部（オープンキャンパス用に2,500部増刷）

特集タイトルは「柄杓流川」

115号：2023年12月発行、1,000部

特集タイトルは「かたろうよ」

116号：2024年3月発行、1,000部

特集タイトルは「古地図を手に、まちを訪ねる」

特別号：2024年3月発行、1000部

特別号は、卒業生を中心とした編集体制で、「暮らしのそばでつながる記録」というテーマで発行した。

また、編集部の学生は、5月20日（土）、8月5日（土）・6日（日）に開催されたオープンキャンパスにおいて、キャンパスツアーの担当として参加した。このオープンキャンパスで『フィールド・ノート』を見て編集に興味をもち、入学後、編集部に入った学生もいる。年齢的にも近いということもあり、キャンパスツアー終了後も、大学での生活や下宿生活の様子などを質問する高校生の姿が多く見られた。

地域の自然や人の暮らしをじかに観察し、取材をして記事にするという『フィールド・ノート』の一連の編集作業には、ただ冊子を発行するだけでなく、言語化が難しい体験と座学で学ぶ学問との往還を繰り返すことでの学びの深化が期待できる。こうしたフィールド・ワークが地域で可能となるのも長い時間をかけて教職員、学生が築いてきた市民との人間関係や信頼関係、人的なネットワークがあるからである。

読者からは次のような感想が寄せられた（一部を紹介）

☐ フィールド暦のファンです。植物に惹かれて見っていますが、蝶や動物たちも気になる存在になってきました。

☐ 柄杓流川の記事と案山子の話が面白かったです。釣りをしているところを一緒に見ているかのような気持ちが味わえました。編集部の方々の多様な視点で作られる記事を毎号

楽しみにしています。

- ☐ どの記事も全部素晴らしいと思って読ませて頂いています。学生が記事を書いているというのも素晴らしいことです。
- ☐ 創刊から 21 年目になられるとのこと、皆様がきちんとつないで来られたこの冊子の重みを感じます。いつも思うことですが、あいさつ文から心がこもっていてぜひ読んでみようと思います。
- ☐ 書き手のみなさんの新鮮でまっすぐな観察眼がとてもよいと思います。大学とミュージアムがかかわるともユニークな活動です。
- ☐ 『フィールド・ノート』は、地域の方々を力一杯応援し輝かせています。それと同時に都留に生きるすべての生きものたちをやさしい目線でつつんでいるのだと今号を読んでではっきりと感じました。地球って、人間のためだけにあるんじゃないとふんわりと教えてくれています。とても良いものを代々、先輩からバトンタッチされているんですね。凄い！
- ☐ 『フィールド・ノート』は、都留文大だけでなく都留市の宝、さらに地方都市の自然と生活と文化を全国に発信していることにおいて日本の宝だと思っています。毎号の表紙写真と言葉が素晴らしく感銘を受けています。
- ☐ いつも室の高い雑誌をありがとうございます。「何気ない自然を自分の目でていねいに観察したい」という想いをなぜ持つようになったのか聞いてみたいです。

(2) ムササビ観察バスツアー

ムササビは身近な哺乳類でもあり、ほぼ定刻（日没後 30 分ほど）に活動を開始することなどから観察会の入門としても適している。赤いセロファンを付けることでムササビに眩しさを感じさせないようにして、できる限り自然な暮らしの様子を観察しようと工夫したのが本学の今泉吉晴名誉教授である。対象となる動物に干渉せず、お互いの暮らしを尊重しながら観察するというそのスタイルを受け継ぎ、ムササビの観察をとおして地域の自然の魅力や共生のあり方を探ろうというのがこの観察会の目的である。都留市の今宮神社をフィールドとし、氏子総代とも連絡をとり日程を決め、開催した。例年、現地までの交通の安全性を考慮しバスで移動するスタイルで実施している。

この観察会では、本学の環境 ESD プログラムを受講する学生の実習を受け入れている。2023 年度の実習生の受け入れは 6 名で、事前準備とムササビ観察会の開催など 45 時間の実習を実施した。

なお、開催日は次の通りである。

- ① 2023 年 7 月 22 日（土）
- ② 2023 年 7 月 29 日（土）
- ③ 2023 年 10 月 21 日（土）
- ④ 2023 年 10 月 28 日（土）
- ⑤ 2023 年 11 月 18 日（土）
- ⑥ 2023 年 12 月 2 日（土）

参加者からは次のような感想が寄せられた（抜粋）

- ☐ 行ったらすぐ、木を登る姿が見られてびっくりしました。また、鳴き声がジーッというような、低い声だったのも予想と違い楽しい発見でした。

- ☐観察に加え、フン探しもとても楽しかったです。子どもも夢中で探していました。学生さんたちの説明もとてもわかりやすかったです。
- ☐とても清々しい時間でした。個人では夜の神社で寝転んで観察などできないので、貴重な体験でした。車の通る道路の横に生息していることが驚きでした。
- ☐ムササビを見る機会なんてめったにないので、すごく貴重な体験でした。
- ☐木の下に寝そべるという経験はあまりすることがないので、とても楽しかったです。いい時間を過ごすことができました。
- ☐自然観察会はいつも関心があったのですがなかなか参加できなくて、今回はじめて参加できてよかったです。この自然を大切にしていけることをこれからも学んでいきたいです。

(3) 都留文科大学附属小学校など地域の小学校への授業参加

学校林や学校に隣接する森をフィールドとし、地域の自然を観察し親しむことを目的とする理科授業を行った。小学校における授業は次の通りである。

- ①都留文科大学附属小学校：3年生、4年生を対象とした理科授業（2023年10月2日、10月17日、10月31日【3年生対象学校林探索】12月4日）
- ②上野原市立島田小学校：3・4年生を対象とした理科授業（2023年10月23日）

(4) 富士急行駅舎を活用した展示活動

2023年度も、富士急行線都留文科大学前駅の駅舎を博物館の分館と位置づけ、展示活動を行った。地域交流研究センターおよび自然共生研究部門の活動を広報し、交流の輪を広げることが目的である。駅舎では、キャンパス周辺の自然をテーマとし、『フィールド・ノート』で掲載した写真を中心に展示を行なった。

本学の華道サークルも生け花を定期的に展示しており、駅舎の利用者にも好評であった。

3. 2024年度の活動予定

2023年度は、当初予定していた活動をほぼ予定通り実施することができた。「自然共生研究部門」では、今後もそれぞれの教員の持ち味を活かしながら事業を展開し、領域を超えた協働による事業にも取り組みたい。

2024年度、北垣が担当する取り組みとしては次のような事業を計画している。

1. 機関誌『フィールド・ノート』の編集・発行
2. 環境ESDプログラムと連携した「ムササビ観察バスツアー」の開催
3. 地域の小学校の授業への参加
4. 富士急行線駅舎を活用した展示活動

上記の1～4の事業を通して、地域の自然や文化を保存するだけでなく、立場を異にするさまざまな人びとが集い、相互の交流・啓発を深めるなかで地域の文化や自然を創造的に継承していけるような仕組みを整えていきたい。また、令和7年度の供用を予定する複合型居住プロジェクトにおける大学連携施設に向けた具体的な設計も始まった。センターが推進する「つるフィールド・ミュージアム」の諸実践や理念を体現するような施設になるようセンターに関わるすべての教職員、学生、市民の意見をいただきながら進めていきたい。

(文責：北垣憲仁)

Ⅱ－１－２．キャンパス内の絶滅危惧植物の保全活動

1. 令和5年度の活動の概要

本学キャンパス内にはキンラン、ギンラン、カワラナデシコ、シュンラン、カタクリ、ウメガサソウ等、絶滅危惧植物が多数生育している。これらの植物を保全し、学生や教職員（将来的には地域住民も含める）が絶滅危惧植物の生態や、植物と環境との関係について学び・親しめる植物園や緑地を整備することを本活動の目的としている。またこれらの活動に加えて、自然や植物を生かした生活の知恵を学んだり、料理・工作等の体験をおこなう。本活動は、様々な世代や学年・多様なバックグラウンドを有する人々が、共に活動・交流し、自然や植物に親しみ、楽しみながら学ぶことを通して、横断的・複合的な学びの在り方や、理論と実践の往還による学びの在り方について実験的に探究することを目指している。昨年度は、学校教育学科、地域社会学科、国文学科、比較文化学科の学生たち約8名と、教職員約3名により、自然科学棟の緑地、コミュニケーションホール北側の緑地、6号館の緑地の保全と手入れ、天然酵母のパン作りやリースの作成等をおこなった。

2. 活動の状況

自然科学棟の中庭のケヤキ大木が伐採され、2年が経過した。伐採により光環境が大きく変化したため、成長の速い“雑草”が入り込み、急速に大きくなるため、定期的に除草をおこなった。除草の際に、毎回、その季節の植物の観察をおこなったり、なぜその植物を除草するのかを説明してから除草をおこなった。R4年度に中庭に移植・播種した絶滅危惧植物（カワラナデシコ、カタクリ、エビネ、チゴユリ）は無事に定着したが、すぐに“雑草”たちに被陰されてしまうため、定期的な除草は欠かせない。また、定期的な除草の合間に、野生の果実（梅、カリン）を利用した天然酵母の培養とパン作り、自然の素材（マツボックリや針葉樹等）を利用したクリスマスリースの作成をおこなった。また、コミュニケーションホール北側の緑地には、絶滅危惧植物のキンランとギンラン、ウメガサソウが生育するが、ウメガサソウがR5年度の夏に盗掘されてしまった。珍しい植物のため、欲しくなる心情は理解できなくもないが、大学の自然財産である以上、今後何らかの盗掘防止策を講じる必要があると考える。また、昨年度の自然科学棟前の道路工事により植栽が伐採されて裸地となってしまった自然科学棟道路際の斜面に、リンゴ、プラムの苗 6本を、学生たちと共に植えた。いずれの活動も、それぞれがただの作業で終わるのではなく、生物学・植物学・生態学的な背景的知識等を織り交ぜながら、学びに結びつくような実施内容を心掛けた。学生たちは、この活動の中で、教職員や学科の垣根を越えて交流を深め、地域の食文化や自然についても体験的に学ぶことができる良い機会となっていた。

表 1. 2023 年度の活動内容と参加人数

日 程	活動内容（基本的に木曜日の 8 ～ 9 時と昼休みに実施）	参加者の人数
5月18日	自然科学棟中庭の手入れ	6 人
5月30日	自然科学棟道路側斜面への果樹の植樹	6 人
6月8日	自然科学棟中庭の除草	7 人
6月20日	コミュニケーションホール北側緑地の除草	6 人
7月 4 日	天然酵母の培養（ウメ）	7 人
7月13日	天然酵母のパン作り	7 人
10月13日	自然科学棟の除草	6 人
10月27日	自然科学棟の除草	6 人
11月10日	天然酵母の培養（カリン）	5 人
11月17日	天然酵母のパン作り	5 人
12月1日	学内の植物を使ったクリスマスリースの作成	8 人
1月23日	THMC（6 号館）の緑地にパンジーとビオラを植付	7 人

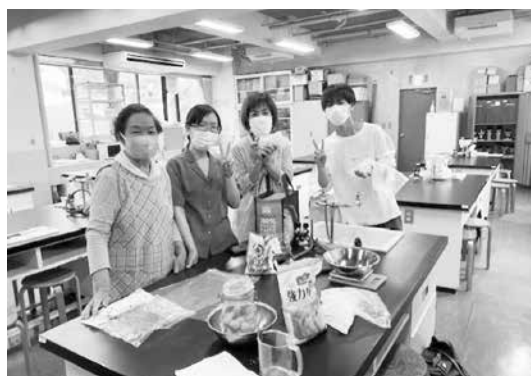


図1. 各活動での参加者の様子

3. 令和6年度の活動予定

令和6年度は、他の団体とコラボレーションし、キャンパス内の植物の保全活動の輪を広げていくことを目標とする。これまでと同様に、ただ除草や保全作業をおこなうのではなく、その植物の特徴や、周囲の環境や他の生きものとの関係性なども含めて生態系としての見かた、考え方に基づく保全活動を展開したい。様々な学科の多様な学生達が参加してくれていることにより、学科を越えた横のつながりと、世代を超えた縦のつながりが形成されている。そこに参加メンバーの様々なバックグラウンドが掛け合わされて、新しい知識や世界との出会いが生まれる。ささやかな活動ではあるが、学生たちの記憶に残る経験となるようこれからも地道に継続したい。

(文責：別宮有紀子)

Ⅱ－１－３．水文環境研究と自然に関わる市民公開講座

１．令和５年度の活動概要

本事業は都留市の人々や動植物の暮らしに関わりの深い水文環境について、地層と地下水流動の関連性に関する研究や、湧水や水循環に関して都留市民との情報交流することを目的として2015年度より継続して実施している。研究対象エリアは東桂地区を主眼に置き、湧水量や地下水位変動などのデータの収集、およびその解析を行っている。また、市民公開講座では、都留市の自然に対して市民の関心を高め、知的欲求を満たすことを目的として開催している。令和５年度は３本の講座を実施した。以下にその詳細を述べる。

２．活動の状況

(1) 都留市十日市場・夏狩地域の湧水調査研究

都留市は富士山頂から直線距離で約25kmであるが、調査地域には古富士火山が山体崩壊して桂川の河谷に流れ込んで形成された古富士泥流堆積物の上に、新富士火山初期の活動期に噴出した猿橋溶岩と桂溶岩の２層が分布している。都留市が利用する富士山からの湧水は、後者の桂溶岩中を流動した地下水がその末端崖より湧出している。この湧水に関して、十日市場の永寿院の敷地を借用して、2015年度から継続して湧水量と水温の観測を実施している。湧水量の観測は、湧水が集まった小水路に自記水位計 S&DLmini (OYO 株式会社製)を設置して1回/時間の連続水位を観測し、流量観測結果を解析して得られたH－Qカーブ(水位と流量との関係式)を用いて水位を流量に換算して湧水量とした。2023年1月から12月までの観測結果は以下のとおりである。

湧水量は約520～750m³/dayの間で変化した。6月始めの台風に関わる日量約140mmの降水、および8月中旬の台風7号による日量60～70mmの降水時には湧水に加えて直接流出による雨が加わって、小水路の流量は700～750m³/dayに増加するが、それ以外の時には多少の降水量には反応せず、湧水量は550～600m³/day程度で安定していた。ただし、昨年度の観測で10月後半に急激に湧水量の値が増加したため、その原因について調査したところ、水路脇の裏山に生えている木が枝払いされ、その枝が水路に落ちることにより枯れ葉が詰まり、ダムのように水路の水位が上昇することが判明した。その影響で2023年度も10月後半より流量が急激に約1050m³/dayまで上昇したが、水路を掃除して枯れ葉を取り除くと約600m³/day程度まで短時間で急激に変化したことを確認したため、秋季の値の増加は湧水量が増加したのでは無く、水路のダム化に伴った水路の流量変化であると判断した。従って、本観測地点での2023年度の湧水量は年間で安定して550～600m³/day程度であると考えられる。水温については、これまでの観測結果と同様に、最高および最低水温のピークがおおよそ3ヶ月程度気温の変化よりずれており、12.3～15.0℃の範囲で変化した。2023年度の温度変化の幅は2022年度とほぼ同じ幅に収まっていることが明らかになった。

(2) 都留市内の地下水位モニタリング

都留市では市民の水道水源でもある地下水を保全する目的で、2018年10月に地下水保全条例を制定した。地下水位の経年変化を把握し、地下水賦存量解析などの基礎資料を得るために、桂町(異なる深度2本)、十日市場、法能、禾生、鹿留、大幡、朝日馬場の市内7地点に8本の地下水位観測井を設け、2019年4月よりモニタリングをしており、本学ではその結果の監修をしている。また、それとは別に2本の地下水位観測孔が十日市場に2本あり、

共同研究として地下水位観測を実施している。2023 年の結果は都留市地域環境課によりホームページ (https://www.city.tsuru.yamanashi.jp/soshiki/chiikikankyou/kankyouseisaku_t/9990.html) で公表されているので参照されたい。

(3) 市民公開講座

令和 5 年度は、湧水さんぽ（1 回）と星空観察会（2 回）の合計 3 講座を開催した。昨年度は湧水さんぽを 7 月に実施したが、暑い時期の開催は参加者への負担が大きいことから、本年度は開催時期を 10 月に変更した。以下に各講座の詳細を述べる。

< 1. 湧水さんぽ >

- ・ 日時：2022 年 10 月 28 日（土） 9:10 ～ 13:00
- ・ 講師：内山美恵子（都留文科大学教養学部学校教育学科 教授）
- ・ 場所：都留市夏狩～十日市場
- ・ 参加者数：7 名（一般市民 2 名，本学教員 1 名，本学学生 5 名），スタッフ 2 名

本学周辺は環境省の平成名水百選「十日市場・夏狩湧水群」に選定され、富士山を涵養源の一つとした地下水が大量に湧き出す湧水が数多く見られるが、地元住民の中にはご存じない方もいる。自分の住む地域の自然に関心を持っていただくことを目的として、例年、大学教員の解説を聞きながら湧水を見て歩く「湧水さんぽ」を実施している。本年度の参加者は学生の方が多くを占め、地元住民の方は 1 名であった。公開講座の狙いとしては少し外れるが、都留に居住し、将来世界へ羽ばたく学生の方に地下水流動のメカニズムや湧水による人々の生活への恩恵などに興味・関心を持って頂けたことは、大きな成果だと考えることができる。

以下は、参加者の感想である。

【感想】（原文のまま）

★大学 4 年間都留に住んでいます、周辺の自然や地形に触れる機会があまり無かったので、今回参加することができて良かったです。内山先生、案内していただき、ありがとうございます。普段の生活のなかでは見逃してしまいそうな地層の構造、水の源についても、今後目に留めていきたいです。特に印象に残っているところは、永寿院の溶岩の先端と、田原の滝の人口物を元々の自然の重なっている部分です。 ★都留市の湧水について、授業で学んだことに加えて詳しく、わかりやす例などを通して教えて頂き、深い理解、正しい理解につながりました。溶岩の特徴や構造について場所ごと理解が深まりました。卒業までに都留についてもっと知っていきたいと思いました。 ★都留の知らない所を見て、とても楽しい一時を過ごすことが出来た。都留の地形と火山の噴火とが不可分であることを知った。単に傾斜に見える地であっても、その生成過程を知ると、土地の経た長い時間を「視る」ことが出来る様に思はれた。又、自然の物から「物語」が作られていることも知った。それが科学的な事実に反していようと、自然物に対する人々の思いを尺えたような気がした。 ★都留に住んでいてもなかなか行く機会のなかった地域を見れた。富士山の溶岩や地層について、説明を聞いて、町の湧水が多い理由を知ることができた。何百年も前の噴火の痕跡がいたる所に残っていることにロマンを感じ、また、火山活動の影響を今の私たちも受けているとい

うことか身にしました。(以上、本学学生) ★とても興味深く、あっという間の時間でした。自分ではなかなか通らない道をたどり、成り立ちからご説明をうけ、より、理解の度合いが深まったと思います。参加させていただけて、良かったです。一般の参加が思っていた程(定員オーバーだと考えていたので)ではなくとてももったいないと思いました。自分の足元を知ることは有益な事だと思います。ますます都留を知りたくなりました。よいきっかけをありがとうございました。★グーグルマップを見ても、道がよくわからないので、湧水の場合を案内して頂けて良かったです。水をくむこともできて良かったです。途中にある、お寺のカフェに寄ってみたいと思いました。日ざしが強く、立ちっぱなしがややつらくなってきたとき、スタッフの方にお気遣い頂いてありがとうございました。(以上、一般市民)
★今日の逆コースはどうですか?今日はハイキングをされている方を多数みかけました。最後田原の滝のところで、谷村堰の話をしていましたので、実際にものを見ながら説明された方が理解しやすかったかも。大学へ戻る途中の川が谷村用水で市内に水路がはりめぐらされているとすると生活との結びつきがわかるのではと思いました。(本学教員)

< 2. 星空観察会 >

- ・日時：第1回 2023年10月19日(木) 18:20～20:50
第2回 2023年11月16日(木) 18:20～20:50
- ・講師：古荘玲子(都留文科大学、国立天文台)、
補助：内山美恵子(都留文科大学 学校教育学科)
- ・場所：都留文科大学 自然科学棟天文台・S6教室
- ・参加者数：第1回 14名(本学学生12名、一般市民2名)
第2回 13名(本学学生7名、一般市民6名)

星空観察会は毎年、参加希望者の多い講座である。本年度も2回実施した。本学は桂川の谷の中にあるため晴天率が低く、星を観望できないことも多いが、本年度は運良く、ちょうど目的の惑星付近で雲が晴れる時間があり、何とか観望会を実施することができた。第1回目は木星・土星・月を、第2回目は木星・土星を観望した。内容は、天体望遠鏡の仕組みや監察する惑星についての講演会、天文台の見学と星の観察、小口径のニュートン式反射望遠鏡を使用した屋上での星の観察、まとめと今後の天体ショーの案内、アンケートである。参加証として、本学天文台をデザインした缶バッジを配布した。

以下は、参加者の感想である。

【感想】(原文のまま)

<第1回>

★大学内にあんなに大きな望遠鏡があること自体を初めて知りました。土星も木星もガリレオ衛星もしっかり見ることができました。カッシーニも見えました。今回の公開講座でカッシーニという言葉を知ったし、星がこんなにも素早く動くことも知らなかったのも天体について学ぶことが多かったです。もしまた機会があれば参加したいなと思いました。

★自然科学棟に足をふみ入れる機会がこれまでほとんどなかったこともあり、とても貴重な経験をさせていただきました。土星も木星も、小中学生の頃に資料集で見たのに近い形で観

察することができ、とても楽しかったです。本日は、ありがとうございました。★今まで望遠鏡で星を見たことがなかったので、あそこまで大きな望遠鏡で観察させて頂けて本当に貴重な体験でした！土星の輪と木星のしま模様が見ることができて感動しました。これから自分でもときどき星の観察を試みようと思います！★土星・木星ともに見られてとても満足した。木星の濃いしま模様、土星の輪の様子を実際に目にしたのは初めてだったので、感動した。貴重な機会を設けていただきありがとうございます。★きれいに見ることができてびっくりしました。在学4年目でこの機会に参加できたことを大変うれしく思っています。ドームの中では、ついテンションがあがってしまって飛びまわってしまいそうになりました。最後にお話をいただいた、まぶしい金星のことも大変興味深かったです。この度はありがとうございました。★本日は、貴重な機会をありがとうございました。日常では、もちろん体験できない事で、大学に居ても自然科学棟の天文台に登ることはなかった。卒業前に、天文台に登れてよかった。土星と木星をはじめて見るのができ本当に良かったです。★観察前に事前知識を共有して下さったおかげで、漠然と星を覗くだけでなく、宇宙の一部として観察することができました。普段天文学に触れる機会が少ないので、専門的な話をポイントごと聞くことができ、そして土星も木星も見れて有意義な時間となりました。★土星と木星、さらにガリレオ衛星まで見るのができ、とても充実した時間を過ごすことができました。文大の望遠鏡で見た土星・木星・ガリレオ衛星に感動しました。ありがとうございました。★曇天で雲の切れ間を待つ時間などもあったが、観測できてよかった。快晴であることを祈って、次回があればぜひ参加したい。★楽しい経験ができました ありがとうございます ★土星の環がよく見え、かわいい指輪の様でした。木星の縞模様は私には見るのが出来なく、残念でした。小さな望遠鏡の中から地球の自転スピードの早さを実感しました。トピックスを見ることを楽しみにします。

<第2回>

★大きい望遠鏡 初めて 見れて 良かったです！もう少し長く他の星を見たかった。楽しかったです。ありがとうございました！★天候に左右される行事なので、仕方ありませんね。だんだん雲が広がってきて、星が隠れてしまって残念でした。ただ、いつも外から見ていたドームに入れて、ドームを動かして頂いた時は感動しました。地球の地軸の角度を改めて確認したり望遠鏡が静止しているのは、重りがあつての事など なるほどなと、思いました。最後に木星が見れて良かったです。★望遠鏡の仕組みと種類について知ることが出来た。ドームの中がどうなっているのか気になっていたが今日はじめて見る事が出来大変興味深かった。沖縄の離島で見た夜空は回りに光がなく星が長く見えた（若かった事も有り）天体観測には環境と運が必要と感じた。★木星が見られて感動です。その他にも大学の勉強を知りたいです。★望遠鏡等の知識が学べて良かったです。木星が見えて感動しました★普段できない貴重な体験をさせていただき、本当に楽しかったです！望遠鏡などの知識も得られたことで、より観察を楽しむことができました。本日は皆様おいそがしい中講座を開講していただきありがとうございました！★曇ってしまったので星を見る事が出来なくて残念でした。望遠鏡の種類など勉強になりました。★くもりで、天気が微妙だったが木星が見えてよかった。望遠鏡には焦点によって様々に種類があることがわかった。昔の人は寒さに耐えて観測していた話がおもしろかった。大きな望遠鏡で星を見る機会はなかなかないのでより経験になった。すばらは双眼鏡で見えるとのことなので、今度みてみたい。★星がみられなかったのが残念でした。望遠鏡について知れたり、星について知れたりできてと

でも勉強になりました。次回は様々な星が見られると良いです。最後に木星が見れたのが良かったです。★思っていたよりも説明が専門的で楽しめた。望遠鏡はとても大きくてけっこう動くことが分かった。★望遠鏡を通しての星の観察はできませんでしたが、←そのあとすこしみれました！普段から気になっていた天体ドームの中と屋上に行くことができ、また望遠居を真近に見て その仕組みや動きを知ることができて好奇心が満たされた感じがします。地域の方と、見れた！と わいわいしながら会に参加でき楽しかったです！★実際に星を見るという体験に重きを置いた講座で大変面白かったです。望遠鏡の仕組みは難しいと思いましたが、様々な種類があることを初めて知りました。★数ある望遠鏡の違いを端的に分かりやすく説明していただき、ありがとうございました。文大にある望遠鏡の名前を知ったうえで、その望遠鏡から木星が見られて良かったです。ドームや望遠鏡が動くことは、非日常的でした。

3. 令和6年度の活動予定

(1) 都留市を流れる水文環境に関する研究の実施

引き続き、東桂地区の湧水データの収集を実施する。

(2) 市民公開講座

令和6年度は、秋など季節の良い時期に十日市場・夏狩湧水群の野外見学を実施する。また、専門家を講師に迎えての星空講演会ならびに自然科学棟天文台を利用しての星空観察は大変好評であるため、来年度も2回実施する予定であるが、先着順では一般市民の方が参加しにくいので、募集方法に工夫を加えたい。

(文責：内山美恵子)

Ⅱ－１－４．^{やに}谷ニラボ

谷村第二小学校での放課後実験教室は平成 23 年度から実施しているが、令和 4 年度より自然共生研究部門の事業と位置付けられた。目的は当初より、①小中学校教員をめざす学生が指導的立場で小学生とともに実験をする経験を積むこと、②学生が実験内容の選定から安全な実験教室の運営までを行う経験を積むこと、③学生の自然科学の素養を高めること、④理科実験教室への参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討することとしている。幸いなことに、継続して学校から実施を受け入れていただいている。参加者数は 35 名程度で安定している。

【令和 5 年度の報告】

昨年度に感染防止の観点から 1 教室での参加人数を 20 名以内、2 教室で最大 40 名という設定としたのが定着した。

第 1 回（6 月 22 日）は、「温度によって色が変わるカードを作ろう！」を行った。示温インクという、約 40℃より低温では青、高温ではピンクとなる性質をもち、小学校理科で熱の伝わり方やものの温まり方の実験に活用されているものがある。これでカードに絵を描き、それをラミネートすることにより、温度によって描かれた絵の色が変わるカードを作成した。子どもたちはできあがったカードをこすって暖めて、色の変化を楽しんでいた。また、作成過程で、ラミネーターを通過すると色が変わることに気が付く子どももいた。38 名参加。

第 2 回（11 月 8 日）では、「しゅわっとバスボムづくり」と題して、重曹とクエン酸を主な材料として入浴剤を作る活動を行った。子どもたちの感想では「袋に入れた材料をもむのが楽しかった」「形をうまくつくれて嬉しかった」が多く挙がった。39 名参加。

第 3 回（1 月 29 日）では、「もっとはねて！ぼむぼむボールづくり」と題し、PVA のり（洗濯のり）からスーパーボールのようなものを作る実験を行った。PVA のりに食塩水を加えると変化するところで子どもたちが一番盛り上がっていた。行った操作により物質の変化が見られることの楽しさを味わえていたら幸いである。また丸める際に球に近く成形できた場合に「ボール」はよく跳ねたことに気づいた子どももいた。33 名参加。

【令和 6 年度の活動予定】

今年度も年間 3 回の実施を予定している。

（文責：山森美穂）

Ⅱ－２．共生教育研究部門

Ⅱ－２－１．地域美術教育

今年度の共生教育部門地域美術活動も地域の教育機関と連携できたことで実現したものです。この連携により、子どもたちを中心とした多くの参加者と共に活動に取り組み、楽しみながら互いを意識し、地域交流の中での他者理解を深める場面とすることができました。この場を借りて充実した時間を提供してくれた多くの方々に感謝申し上げます。そして、参加者から活動中に寄せられる活動の感想は、今後の活動にとって大きな励みとなるものでした。多くの方々の支えを受けて地域交流活動は実現できたのです。

地域美術活動の運営における今年度の変更点としては、都留市保小連携事業宝保育所造形活動において、大学生スタッフの募集方法に変更を加えた点です。従来の活動は、学校教育学科図工・美術系所属の学生に周知し募ってきました。しかし、今年度の地域美術活動は、図工・美術系所属に限らず、活動に興味を持つ学生が参加できるようになった点です。

都留文科大学は、授業履修を中心として、様々な活動への選択の幅を広げた新たなカリキュラムに向け、校内全体が取り組み新たな挑戦をしています。学生の個性や目的に合わせた育成の必要性を反映したものです。

様々な場面で生きた学びを実現することは、容易なことではありません。しかし、自分にとって現実の経験を得ることのできる人びとや地域との交流活動は、その実現に向けた手がかりとなります。地域交流研究を基礎として現実を認識することは、生きた学びの必要性を知り、関わりによって生まれる大切な価値を意識させると確信しています。

大学の理念として学生個人の興味や意思決定を尊重するためには、学びの機会の充実を図ることは欠かせません。だからこそ、大学に所属する研究者一人一人が地域交流の持つ意義を再確認し、この環境だからこそ可能な、生きた学びへの強い憧れを持つことが重要であると考えています。

更にそのことによって、大学として考える身近な地域の重要性を都留文科大学に在籍する学生に憧れを感じさせ、地域の声や未知の可能性に触れることによってしか気が付かない視野や自分の活動の舞台がここにあることに気付く機会を与えるのだと考えます。

大学の教員のような専門的な経験を持つ人が参加することの意味は、学術的研究の必要性や内容の深さを公開する意味があります。また、それ以上に、地域交流活動は、実際に多様な人同士が関わることで経験の大切さを活動によって知ることです。そのようなことを繰り返すことで自然に活動することの意味は深まり発展していくものなのです。大学の関係者も地域の人々も舞台を共にする一員として交流を続けることで、新たな価値を生み出すことができると考えます。

以上のような取り組みを通じて、地域美術活動は、より多くの人々にとって魅力的なものとなり、地域や人が交流を通して活発化する手がかりとなります。今後も、学生と地域との関係を深めながら、より良い活動を展開していくことが求められています。

今年度の活動

都留市連携事業 宝保育所造形活動 6/23 10/27 1/26

都留市立谷村第二小学校土曜体験学習「陶芸」10/28

都留市教育委員会 夏休みこども公開講座 「やきもの工作」7/29

都留市立都留文科大学付属小学校 「やきもの授業」2/19



宝保育所造形活動の様子



宝保育所造形活動 廃材資源を利用した工作

(文責：青木宏希)

Ⅱ－２－２．地域インクルーシブ教育

１．地域インクルーシブ教育分野の目的

地域インクルーシブ教育分野は、地域の特別なニーズのある人たち（およびご家族）への教育・心理的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的としている。

この分野の主要な活動は以下である。

- ① 特別なニーズのある人たちの週末の居場所づくりの活動“クロボ”
- ② 特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動“キャリアデザインワーク”
- ③ その他、特別企画（2023年度は、“東京の病弱教育の主人公たち作品展”）

２．活動の内容

①特別なニーズのある人たちの週末の居場所づくりの活動“クロボ”

正式名称は、「クロスボーダー・プロジェクト」という活動である。「健常者と障害者の境界（ボーダー）を超える」という意味で名称を「クロスボーダー」とし、かつそのプロセスとして地域の方々と「コラボ（連携）」してやっていきたいという意味で通称を“クロボ”としている。

2023年度は、学期中、月1回土曜日に10:00～15:00で実施し、各回、小学生～社会人までで計30～40名程度（登録者としては、就学前1名、小学生4名、中学生3名、高校生7名、社会人16名 ※2023年5月時点）が参加してくれた。その他、午前中のホッケー活動のみ、社会福祉法人あすなろ会 みとおしの利用者さん数名がゲスト参加してくれた。

毎回、平均50名ほどの学生や市民がボランティアとして参加してくれた。例年通り、学校教育学科「特別支援フィールドワークⅠA・ⅠB」「教育フィールド研究ⅡA・B・C・D」を受講する学生も、学生ボランティアとして参加した。

計画していた年間6回全てについて実施することができた。

<前期>

5月13日（土）【午前】ダンス、ホッケー、フロアボール

【午後】アート

6月17日（土）【午前】ダンス、ホッケー、パラスポーツ

【午後】アート、てつがく

7月15日（土）【午前】ダンス、ホッケー、パラスポーツ

【午後】音楽・てつがく

<後期>

10月21日（土）【午前】ダンス、ホッケー、フロアボール

【午後】音楽・てつがく

11月18日（土）【午前】ダンス、ホッケー、フロアボール

【午後】環境学習

12月9日（土）【午前】ダンス、ホッケー、パラスポーツ

【午後】音楽、アート、てつがく

クロボは、午前が全体活動、午後がグループ別活動としている。午前のフロアボールについては、2022 年度後期に続き、都留フロアボールクラブ Buzzle との連携で実施した。

各回の活動の様子については、写真とともに、大学 HP に掲載した。以下が 2023 年度の活動の様子である。



フロアボール（5 月）



てつがく活動（6 月）



音楽活動（10 月）



環境学習活動（11 月）

②特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動“キャリアデザインワーク”

☐ 概要

本事業は 2015 年度からクロボのグループ活動の一つとして開催されてきた。2017 年度からは特別支援学校教職課程が開設されたことに伴い、当該課程のフィールド科目「特別支援フィールドワークⅡ」（集中講義）として位置付けられ、年間 6 回のワークを実施している。特別なニーズのある中高生や若者の将来イメージ形成に寄与する「思春期キャリア支援プログラム」として実施し、学生が当事者の将来展望の育成を目指すプログラムを企画運営するフィールド研究の場となっている。

☐ 参加者

中高生・若者の当事者 12 名、大学生 12 名、保護者 11 名

□運営委員（地域の専門家）11名

元都留文科大学特任教授、障がい者就業・生活支援センターありす就業支援ワーカー、フリースクールオンリーワン理事長、山梨県立ひばりが丘高等学校教諭、山梨県立やまびこ支援学校教諭、元大月市立小学校通級指導担当教諭、フリースクールにじらボ代表、県立高等支援学校桃花台学園教諭、保護者（放課後等デイサービス事業者、親の会「ぶどうの会」代表者）

□職場提供者

職場体験にご協力下さる事業所等は10カ所以上あるが、2023年度は更に2カ所を新規開拓し、次の5カ所で体験させていただいた。暖かい理解のもとで貴重な体験ができたことを感謝している。

就労支援センターいちごいちえ様、ダイハツ都留店様、セブンイレブン都留文大通り店様、フラワーマーケット花さかじいさん様、都留文科大学図書館様

□ワーク実施内容

目標 ○自分はどんな大人になりたいか、仲間と一緒に考えてみよう。

○どんな仕事に向いているか、職場体験をしてみよう。

○将来の夢や希望をつかみ、今できることに取り組もう。

内容（場所：3号館または6号館）

No	日程等	内容
1	5月13日（土）13:00～15:00 保護者説明会 10:30～12:00	○キャリアデザインワークへようこそ（昨年度の振り返り／名札づくり＆自己紹介／CUPS／パパ抜きトーク）
2	6月17日（土）13:00～15:00	○ルージュの伝言（ナンジャモンジャでペアになろう／みんなに伝えようゲーム）
3	7月15日（土）13:00～15:00 保護者の語り場① 10:30～12:00	○手をのばしてもう一度（だるまさんがな～にした／職業カルタ）
4	10月21日（土）13:00～15:00 保護者の語り場② 10:30～12:00	○「ここで働かせてください!!」（あいさつ練習／職場体験先へのあいさつ）
5	11月11日（土）10:00～15:00	○大切なのは、心よ。【職場体験】（いちごいちえ／ダイハツ／セブンイレブン／花さかじいさん／図書館）
6	11月12日（日）10:00～15:00 保護者の語り場③ 10:30～12:00	○グッドラック！（風船バレー／職場体験の振り返り／ありがとうを手紙に／CUPS／今年度の振り返り／アルバム作成／お疲れ様会）

□成果と課題

全国的に見ても、思春期からのキャリア支援プログラムを「キャリアデザインワーク」のような形で教職課程の科目として位置づけている大学は数少ない。そこで、この活動の必要性や実践の成果を広く知ってほしいという願いから、全国障がい者生涯学習支援研究会が開催する研究集会で2023年11月に発表の機会をいただくことができた。

キャリアデザインワークにおける当事者の育ち、学生の学び、保護者同士のつながりなどを、前任の原まゆみ先生がまとめられた「思春期キャリア支援プログラム実践枠組みのモデル図（以下、モデル図）」に含まれる7つの構成要素との関連性を明らかにしながら報告した。

毎回のワーク後の反省会で、参加者や活動について丁寧な話し合いを行ってきたことは、学生にとって当事者理解とそれに基づいた柔軟なプログラムを創出する貴重な機会となった（モデル図①自分づくり支援）。また、学生がワークを重ねていく中、参加者との関係性の変化について「学生と当事者はただ企画者と参加者であるのではなく、関わり合い影響し合うことによって、“キャリア”についてともに考えを深める同一の探究者であることに気づかされた」と記したように、学生が指導的・支援者的にならず一人の若者として同じ地平に立って活動する関係性へと変化していった（⑥同世代の若者の関与）。職場体験に向けては、学生が参加者の希望に沿った体験先を探し、趣旨を理解してもらった上で依頼を行った。調整がつかなかったり、依頼を受けてもらえなかったりする事業所も複数ある中、新たな体験先を2か所開拓することができた。学生の努力に拍手を送りたい。年1回の職場体験ではあるが、地域協働の構築を生み出し、参加者の自己有用感の高まりや職業への憧れ、生活への意欲に結びついていると実感する（④地域協働の構築 ②社会的自己の気づき支援）。

今年度、高校3年生の二人が、「今年でこのワークへの参加は終わりにする」と自分で決めた。思春期から参加できるプログラムが殆ど見当たらない現状の中、中学時代から参加してきた二人にとって、このワークは就労に直面するまでの期間が長くとれ、不安定になりがちな自己形成の過程を丁寧に支援できる移行期支援の基盤となったのではないかなと思う。何より「ワークからの卒業」を自己選択自己決定できたことを嬉しく、そして、頼もしく思う（③狭間問題への対応 ⑦思春期からの参加）。しかし、卒業したから「よし」ということではない。高校時代から参加し、社会人になった今も継続して参加してくれている参加者もある。ご本人が「参加して10年になり、そろそろ卒業かとも思うが、また来年も参加したい」と力強く話してくれた。年6回のワークではあるが、生活の中の大事な場に思ってくれていることが伝わってくる。学生よりも人生の先輩として、「⑥同世代の若者の関与」を存分にくりながら、「①自分づくり」や「②社会的自己の気づき」を更に深めたり高めたりしてもらいたいと思う。これもまた大事な自己選択自己決定であると思う。

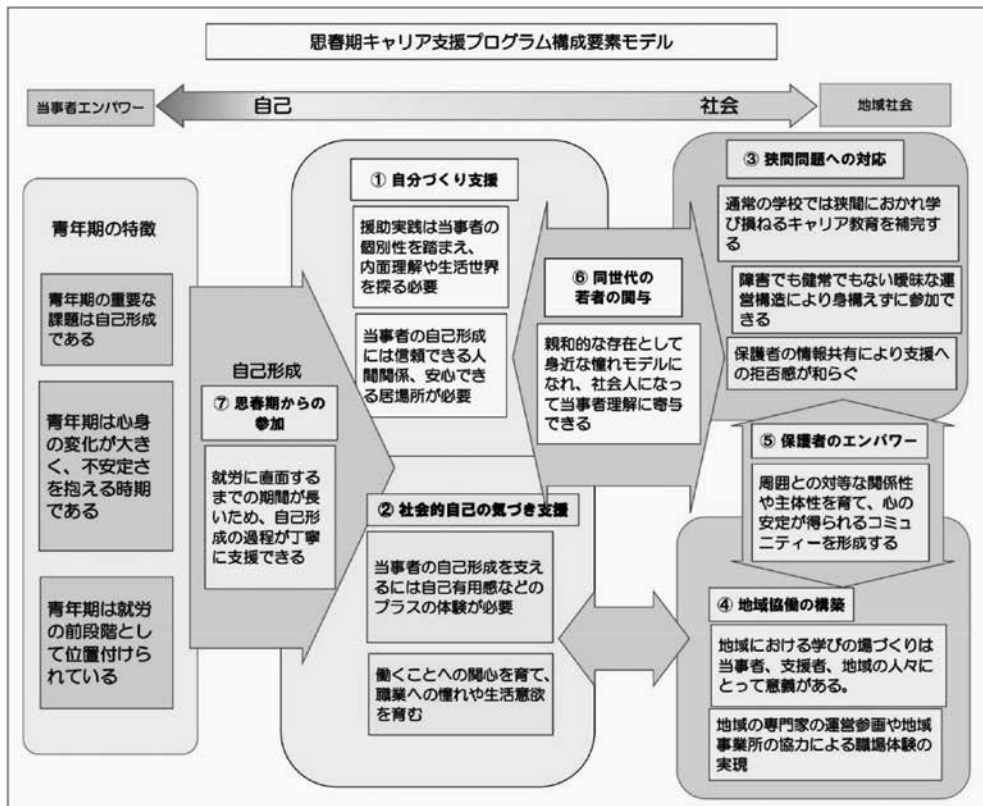
参加者の年齢層の幅が広がる中、学生が参加者一人一人にとってのワークの意味を考えながら、新たなプログラムを作り出していくことにも期待したい。

年3回実施している保護者の語り場では、「我が子の育ちを話そう」「仲間になろう」「励まし合おう」を合言葉に、我が子の養育の様子や進路の悩みなどが自由に話しあったり、他で話すことができない思いを語ったりできる場になっている。長年参加されている保護者からの「初めの頃はみんなで泣いていた。でも、今は笑い合えるようになった」という言葉や新たに参加された保護者から「ここに来てよかった。これからも参加したい」という言葉から、この語り場が「吐き出せる場」「つながれる場」「支え合える場」になっていることが伝わってくる（③狭間問題への対応 ⑤保護者のエンパワー）。

運営委員の皆様には、今年度もキャリアデザインワークを様々な角度から支えていただき心から感謝している。

キャリアデザインワークの実践および研究が、発達障害等のある若者の学校から社会への移行期支援に活用され広がっていくことを切に願っている。

思春期キャリア支援プログラム実践枠組みのモデル図



文献

原まゆみ 2021「発達障害等のある若者の学校から社会への移行期支援に求められるもの—思春期キャリア支援プログラムの実践検証をととして—」放送大学大学院修士論文

③特別企画“東京の病弱教育の主人公たち作品展”

2023年10月24日（火）から11月5日（日）までの約2週間に渡り、「東京の病弱教育の主人公たち作品展」を開催した。元都留文科大学特任教授の斉藤淑子氏がJSPS 科研費の一部を活用して制作した冊子「東京の病弱教育の主人公たち作品集」をもとにした作品展である。病院内教育経験者や保護者の皆様からお寄せいただいた作品のパネルや実物を展示し、病氣と闘いながら、自分と向き合い、友達や教員と共に学んだ子どもたちの思いを伝える貴重な機会となった。

THMC 2階エントランスホールに、たくさんの作品が並び、大画面モニターには作品のスライドと院内学級の生徒たちが取り組んだ軽音楽部の演奏が流れ、心温まる居心地の良い空間ができあがった。

来場者名簿に記載された人数は238名。本学の学生、教職員、教育・福祉関係や地域住民の方々の他、作品の作者やそのご家族も何組か来てくださった。

来場者の感想をいくつか紹介する。

- ◆子どもたち・作品のエピソードを聞くと、「この子はもう亡くなっちゃったんだね」とよく聞きます。最初はびっくりし、悲しい気持ちでいっぱいでした。でもこの作品展で、「どれも生きた証・生きている証」なんだ！って思いました。どの子

も希望をもって生きてきたからこそ、こんなにキラキラした作品を作れるんだと思います。どの子も人生の主人公ですね。それぞれの子が心にずっと残ります。だから私の心の中ではみんな生きています。そんな証に出会えてよかった！（学生）

◆貴重な時間を頂いてありがとうございました。病院の外からではなかなかわからない状況を知り、自分にも何かできることはないかな…と思いました。病気を持つ気持ちは、病気の経験や同じように病気と向き合っている人にしかわからないとは思いますが、病気以外の部分で先生たちがサポートすることは大きな支えになっていると思いました。今回の展示が子ども達にとって、とても嬉しいものであるんだろうなと映像を通して感じました。（大学教員）

◆一つ一つのことが当たり前じゃない。今出来ることを、自分が出来ることを、今、自分がしていかなければいけないと思いました。やりたくても出来ない人がいるのに、やれる僕がやらないのは嫌だから多くのことを挑戦していきたいと思いました。幸せだから笑うんじゃなくて、笑うから幸せだ（一般）



3. 2024 年度の活動の展望

ポストコロナで、ほとんどの活動についてコロナ前と遜色ない形で展開できるようになってきた。2024 年度についても、関係者の様々な声を受け止めつつ、引き続き楽しくわくわくするような活動を行っていきたいと考えている。

2023 年度については、担当教員である佐藤先生からの特別企画として、“東京の病弱教育の主人公たち作品展”を実施した。個々の担当教員の主体的な企画立案や提案は歓迎すべきことで、「地域インクルーシブ教育」を掲げる分野であるからこそ、関係者が「やりたいことがやれる」ことが、大事ではないかと思う。2024 年度も、本分野としては、ニーズに応じて特別企画を開催できる余白を大事にして展開していきたいと考えている。

（文責：堤英俊・山本剛・佐藤比呂二）

Ⅱ－2－3. 社会教育

1. 社会教育分野について

共生教育研究部門の社会教育分野は、地域における多様なエージェントを巻き込みながら、それらがつくりだす共同学習の支援を旨とし、とりわけ、都留市内に新たな成人教育の場を創出し、そこに高等教育機関としての本学がもつ学問知をつなぎ合わせることを目的とする。

2. 2023 年度の活動：「つるぶん café」の開催

①活動の趣旨

「つるぶん café」は上記のことを目的として都留市内の喫茶店を会場とし、現代社会の問題や文学・芸術にまつわるさまざまなテーマを企画して地域住民、喫茶店オーナー・スタッフ、学生、講師が共に学び合う中からその後の関係につながるような場を提供する。

2019 年度に初回開催後、コロナ感染症拡大のため中止となっていたが、2021 年度はオンラインで実施、2022 年度以降対面での開催が再開された。

② 2023 年度「つるぶん café」の概要

日 時：2023 年 11 月 18 日（土）14：30～16：00

テ ー マ：短歌の言葉、わたしの言葉

講 師：瀬口真司（立教大学大学院博士後期課程、歌人）

場 所：バンカム 2 階

定 員：22 名（学生補助 4 名を含む）

事前申込：必要

参 加 費：無料（飲み物一杯の注文を参加者にお願いする）

3. 2023 年度の総括と 2024 年度に向けて

今回の企画は、前衛短歌研究者であり現代歌人でもある瀬口真司さんをゲスト講師にお招きして、短歌の創作と短歌を解釈することについてフリートークを交えながらお話を伺った。現代短歌の最先端を知る若手歌人と短歌に関心を持つ参加者が一首の歌の解釈をめぐって自由に意見を交換し、議論は大いに盛り上がった。

「つるぶん café」の趣旨は以下の点にある。市内の喫茶店を借りて教室とは異なるリラックスした空間と近い距離をつくること、それほど多くない人数のささやかな集いであること、講師が一方的に学問知を押しつけるのではない双方向的なやり取りや遊びがあること。こうした趣旨に沿う形で、今後はより多くの地域住民の参加を促すため、広報の仕方を見直す必要がある。

（文責：吉田恵理）

Ⅱ－３．まちづくり研究部門

まちづくり研究部門の目的

まちづくり研究部門では、持続可能なまちづくりを学生とともにデザインし、地域住民や自治体、地元企業等と連携しながら実践活動に移し、実社会での学びの機会を創出することを目的としている。学生自らが地域社会の課題を捉え、その解決策を考え実践活動につなげ、これからのまちや地域社会のあり方を考察する機会を創出するとともに、地域に対する関心を高めることを目的とする。2023年度は、富士急行株式会社・都留市と連携し、谷村町駅舎を活用した地域づくりプロジェクト「ぷらっとはうす」及び都留市におけるサイクリングロードの創出、の2プロジェクトを実施した。

1. 富士急行線谷村町駅舎を拠点にした地域連携のまちづくり「ぷらっとはうす」

目的

本プロジェクトは、谷村町駅舎を拠点に地域と大学生との交流・学び・まちづくりの拠点を創出し、中心市街地の賑わいづくりに寄与するとともに、地方鉄道を持続可能なものとして市民が支えるしくみづくりを試みることを目的とする。

事業名称・事業主体

全体事業名

産官学民連携による「谷村町駅舎を活用した地域づくりプロジェクト」

事業主体（下記5者による協働連携）：

- ・早馬町自治会
- ・富士急行株式会社
- ・都留文科大学教養学部地域社会学科鈴木健大オープンゼミ
- ・都留市
- ・生涯活躍のまち・つる推進協会

実施方法

地域社会学科鈴木健大担当による、全学部全学科の学生を対象にした、オープンゼミとして実施

実施内容

谷村町駅における放課後の子どもたちの居場所づくり「ぷらっとはうす」を実施した。

2018年12月、駅舎旧宿直室をリノベーションし、無人駅を地域活動拠点の一つとすべく開始したが、2020年からのコロナウイルス感染拡大を受けて、その後3年間は閉鎖や制限を受けた中での活動であった。従って、2023年度はコロナ対応の制約から解放された年度となった。

従って、2023年度は谷村第一小学校にチラシを配布することができ、毎週水曜日のレギュラーの開催では毎回7、8人ほど、多い時は10人ほどの子どもたちが集まり、6畳2間のスペースは賑わった。毎回このほかにも、七夕祭り、夏休み宿題教室、文化祭、クリスマス会のイベントを実施した。また、2019年以来の「つる子どもまつり」に出展した。

- (1) 「ぷらっとはうす」(於：富士急行線谷村町駅)
4/12(水)～2/21(水) 毎週水曜日 15:30－17:00、計28回
宿題の手伝い、ゲーム、お絵描き等(参加人数は概ね毎回7,8人程度)
 - (2) 「夏休み宿題やつつけ隊」(於：富士急行線谷村町駅)
8/9(火) 10(水)、10:00－12:00、計2回
 - (3) 「第54回つる子どもまつり」参加(於：都留文科大学)
5/14(日) 10:00－15:00(「くに企画」出展)
 - (4) 「七夕祭り」(於：ふるさと会館)
7/2(日) 14:00－16:00
七夕飾りづくり、短冊飾り、輪投げ、魚釣りゲーム
 - (5) 「ぷち文化祭」(於：富士急行線谷村町駅)
9/24(日) 14:00－16:00
チャレンジ・ボウリング、占いの館、宝探し
 - (6) 「クリスマス会」(於：ふるさと会館)
12/17(日) 14:00－16:00
クリスマスリースづくり、ゲーム、ビンゴ大会、プレゼント交換
- そのほか：6/3(土) 4(日) 羽野幸氏主催 田植え体験参加(大学生のみ) 計9名
9/29(土) 9/30(日) 羽野幸氏主催 稲刈り体験参加(大学生のみ) 計6名

2023 年度を振り返って

2020 年 12 月から開始し 5 年 3 ヶ月になるが、この内の 3 年間でコロナウイルスの流行期間と重なってしまった。長期に渡り活動に制限を受け、立ち上げ期の学生たちは卒業してしまい、当初の活動内容や意気は引き継がれることが困難となり、参加学生にとってモチベーションの維持さえも難しい時期が続くこととなった。従って、2023 年度は再スタートとも言える年度となった。通った子どもたちの顔ぶれも一新した。

おかげで近隣の子どもたちに認知され、毎週盛況に開催することができた。大学生にとっては駅舎でのこの活動だけにとどまらず、この恵まれた環境を活かして、地域活性化に幅広く取り組んでいってもらいたい。

参加学生 計 38 名

地域社会学科 29 名、英文学科 1 名、国文学科 3 名、比較文化学科 3 名、
学校教育学科 2 名



「ぷらっとはうす」の様子(2023 年 5 月)



「つる子どもまつり」の様子(2023 年 5 月)



稲刈り体験の様子（2023年9月）



「クリスマス会」の様子（2023年12月）

2. 富士急行線沿線の活性化を目指した観光まちづくりの実践

目的

山梨県では、第二次山梨県自転車活用推進計画（2023年4月改定）を策定し、「サイクル王国やまなし」の実現を目指している。自転車活用をまちづくりや観光、健康増進、スポーツ振興等に活かすことを目標に掲げているが、都留市においては施策策定や事業実施の段階になかった。一方、富士急行では、サイクルトレインの運行を行なっているが、その周知や利用が十分に進んでいなかった。

そこで本プロジェクトは、都留市に自転車活用を推進すべく、市内にサイクリングの舞台となる新たな観光資源を発掘し、サイクリングコースとして地図にまとめ、市内サイクリングの可能性について提案することを目的とする。

実施方法

地域社会学科鈴木健大ゼミ4年生及び2年生「実践科目」有志によりゼミ形式で実施

実施内容

2023年度は、都留市内に5本のサイクリングコースを提案し、マップにまとめた。

前期は、富士急行及び都留市による講義、観光やマーケティングに関する基礎学習、市内フィールドワークを行い、7月下旬に富士急行及び都留市に中間報告として、フィールドワークで発見した観光資源について発表した。

夏季休暇から後期にかけてフィールドワークを重ね、サイクリングのテーマについて考察を深め、11月下旬、5本のサイクリングコースとしてマップにデザインし、富士急行及び都留市と共に最終報告会を開催した。

提案した5本のコースはいずれも高評価を得、富士急行及び都留市によりマップの印刷を行い、今後市内各所に設置、オープンキャンパスや出前授業等で活用していくこととなった。

（1）ゼミの実施

定例ゼミ：4/10（月）～11/27（月）、毎週月曜日18：10－21：00、計24回

実施内容：富士急行及び都留市講義、統計や輪読による観光に関する基礎学習、マーケティング基礎学習、自転車を活用したツーリズム先行事例調査、

地域（SWOT）分析、企画立案、企画プレゼンテーション、マップ制作

（2）中間報告会の開催

7/24（月）、18：15－19：30

調査中間報告、地域（SWOT）分析報告、意見交換

（3）最終報告会の開催

11/27（月）、18：15－20：00

コース提案、採用可否審議、採用案決定、意見交換・振り返り

（4）サイクリングコースマップの制作・印刷

①「つるトキメキカフェ巡り」

②「Enjoy the journey through history and nature!（インバウンド対象）」

③「自転車で行く 癒しと御朱印の道」

④「都留市は水のテーマパーク！？ すいすいかけめぐりコース」

⑤「マイナス15歳！？ チャリから始まる元気100倍旅」

2023年度を振り返って

2020年度から2022年度はマイクロツーリズムを企画提案し、販売してツアー運営を行なって観光資源を発掘していたが、これまでにないツアーを企画し販売することは三者にとって負担が大きかったことから、今年度は販売に捉われない成果を目指して、地域の観光づくりに取り組んだ。

プロジェクトを進めるのに際し、学生たちのフィールドワークのために、都留市からは電動自転車4台を借用し、富士急行からは電車の乗車に関して取り計らいをいただいた。また、印刷物制作のために、2023年度はセンターにPCとプリンター一台、Adobe社編集ソフトを予算化していただいた。このようなバックアップがあり、地図制作まで漕ぎ着けることができ、企画立案した5本のサイクリングコースはいずれも高評価をいただいた。

今回のプロジェクトを契機に、富士急行は、都留文科大学前駅に2024年2月から電動自転車3台を配置し、自転車のまちづくりを開始する端緒となった。

反省点としては、フィールドワークを開始する時期が遅れ、開始時期が梅雨の時期となってしまう実施が困難となり、梅雨明けからは暑さでフィールドワークを実施するのに厳しい環境となってしまった。また、初めての取り組みであることから、進め方に手間取った面も否めなかった。これらのことは、次年度から改善していきたい。

なお、富士急行・都留市との三者連携は、2023年度は9/23（土）にプロギングイベント（市内清掃活動）、11/20～1/19におけるAIデマンドバス実証実験（国土交通省「令和5年度地域交通共創モデル実証プロジェクト」採択）にも発展し、幅広い展開につながった。

観光名所や景勝地がない地域において新しい観光を創出する、といった目的に向け、これまでの経験や知見を踏まえて、三者で振り返りと改善を重ねてきたことから、プロジェクトが進めやすくなり、また、新たな事業展開にもつながった。

最後に、富士急行及び都留市、フィールドワーク先でお世話になった皆様、本学職員の皆様、お世話になりました全ての皆様に感謝申し上げます。空き時間や夜間、土日、夏季休暇と、社会に新しい価値を生むことに精進した学生たちの努力には最高の賛辞を送りたい。

参加学生 計32名

鈴木ゼミ4年12名、2年「実践科目」履修生有志10名



観光ゼミの様子（2023年11月）



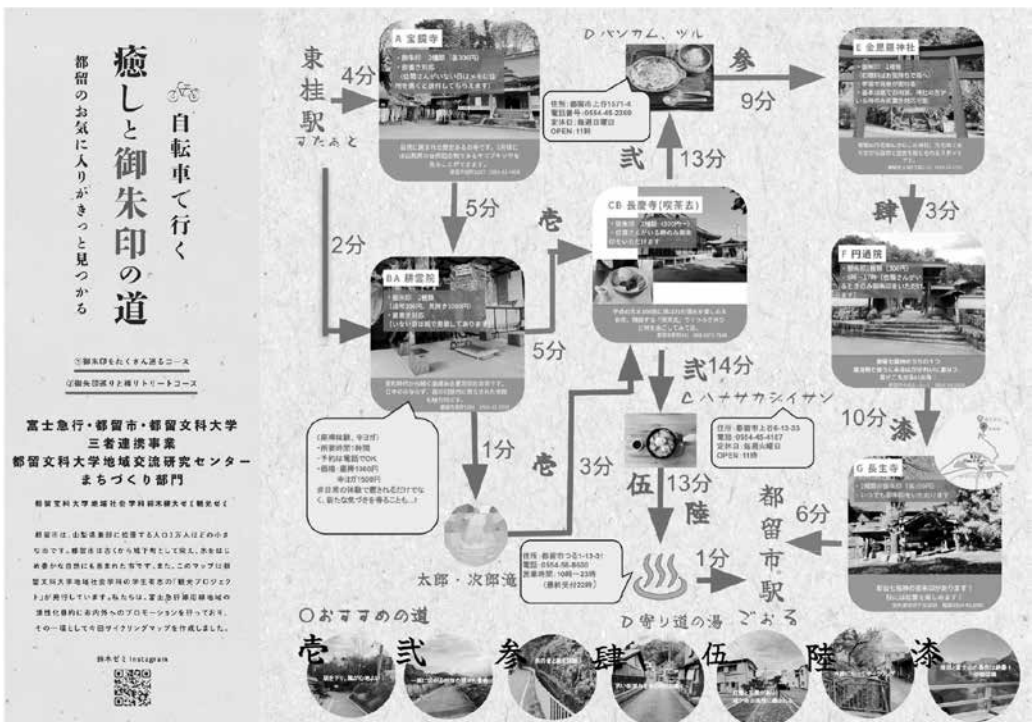
最終報告会の様子（2023年11月）



作成した5本のサイクリングコースマップ
（2024年3月）



都留文科大学前駅に設置された電動自転車
（2024年3月）



作成したサイクリングマップの例「自転車で行く 癒しと御朱印の道」（2024年3月）

（文責：鈴木健大）

Ⅱ－４． グローカル交流研究部門

グローバル交流研究部門の目的

地域の自然と文化の魅力を学び、また本学の留学生や多様な人びととの交流から地球規模の視野を育み、持続可能な社会のあり方をともに考えることをテーマとしている。昨年度に引き続き、2023 年度も交換留学生を対象としたムササビ観察会を都留市鹿留にある今宮神社において実施することができた。コロナもだいぶ収束し、海外大学との交換留学も再開されていることから、徐々に交換留学生と本学の学生や地域の方々などが共に行う活動を増やしていきたいと考えている。

1. ムササビ観察会目的

ムササビは日没後 30 分ほどで活動を開始するため、生息場所を確認してさえおけばほぼ確実に会うことができる野生動物である。このムササビの生活を脅かさないよう少人数で観察するなどの工夫は、今泉吉晴氏（本学名誉教授）により都留市で編み出されたもので、地域交流研究センターでこの観察会を受け継いできた。本学の学生が主体的に観察会を運営し、留学生とムササビをじかに観察することでムササビの生態とともに地域の自然、世界の自然の現状についてともに考えることを目的とする。

プログラムの名称

ムササビ観察バスツアー

実施方法

地域交流研究センターの自然共生研究部門で開催してきたムササビ観察バスツアーと同様の方法で開催した。本学の環境 ESD プログラムを履修する学生が主体となり留学生を対象としたムササビ観察バスツアーを企画・運営し、国際教育学科の学生が通訳として参加した。都留の自然に関心を持つ留学生が多く、多くの申し込みがあった。

実施内容

まず、本学の環境 ESD プログラム履修生のうち地域交流研究センター主催のムササビ観察会を実習先として選択した学生が、この観察会の企画と運営を担当した。事前の観察と打ち合わせ、リハーサルをするなど 1 ヶ月ほど準備をした。また国際教育学科の 3 名の学生がアシスタント及び通訳として参加したこともあり、企画・運営の学生と留学生との意見交換も実現できた。ムササビが生息している都留市鹿留にある今宮神社へは安全面を考慮してバスで移動した。神社ではムササビが生息する自然環境について説明をした後、観察を行ったが、幸いムササビが滑空する姿を確認することもできた。またムササビの生息を確認できる糞などを境内で探す活動も行った。神社での観察終了後、地域交流研究センターに戻り、学生による解説と振り返りの講座を開催した。

実施日時：2023 年 10 月 21 日（土）、16 時 30 分～18 時 30 分

開催場所：地域交流研究センター 観察場所：都留市鹿留今宮神社

参加者：学生スタッフ 3 名、留学生 12 名、国際教育学科学生 3 名、教員 2 名、事務局 1 名

一年間を振り返って

国際教育学科と連携のもと、今年度もグローバル交流研究部門として自然観察会を開催することができた。2時間という短い時間ではあるが、参加者が野生動物を観察する経験を共有し交流することで地域の自然、世界の自然について考える契機ともなる。今後も、地域交流研究センターで蓄積してきた観察会の手法を活かして、留学生、学生、市民を交えた自然観察会も計画していきたい。

(文責：原和久・北垣憲仁)

Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ-1. 第19回地域交流研究フォーラムの開催



第19回地域交流研究フォーラムの開催

「ゆうやけ子どもクラブ！」上映会&クロストーク

開催日時：2023年10月27日（金） 18時10分～21時00分

開催内容：映画上映（「ゆうやけ子どもクラブ」）のあと
ゲストとともにクロストークを行う

第19回地域交流研究フォーラムの開催

「ゆうやけ子どもクラブ！」上映会&クロストーク

開催日時：2023年10月27日（水）18時10分～21時00分

開催内容：映画上映（「ゆうやけ子どもクラブ！」）のあとゲストとクロストークを行う

事務局

ただいまより、第19回地域交流研究フォーラム「ゆうやけ子どもクラブ」上映会&クロストークを開催いたします。始めに、本日のスケジュールをご案内申し上げます。この後18:15～20:15まで「ゆうやけ子どもクラブ」の上映を行います。上映が終了しましたら、20:25まで10分間の休憩をとらせていただきます。この休憩時間中に、受付でお配りしました、「ご意見・ご質問」の用紙の回収をさせていただきたいと思いますので、「ご意見・ご質問」がある方は、休憩時間中にステージ横の回収箱へお願いします。休憩後の、20:25～クロストークとなります。終了は21時を予定しております。長時間となりますので、本日電車でお帰りになられる方は、電車時刻に合わせて途中退席いただいても結構ですので乗り遅れの無いようお願いいたします。ここで電車の時刻をお知らせします。富士急行線上り大月方面 20時44分 その次が21時52分となります。富士急行線下り河口湖方面 21時14分 その次は 21時33分となります。電車の方はお気を付けください。それでは、地域交流研究センター長の鈴木健大教授より、開会のごあいさつを申し上げます。鈴木先生お願いします。

鈴木先生

皆様こんばんは、地域交流研究センター長の鈴木健大と申します。本日は金曜日のこのような夜の時間に大勢の皆様、お集まりいただきありがとうございます。本地域交流研究センターは発足して今年でちょうど20年になります。地域をフィールドに教育研究の視点で地域と学びの場を作っております。今日皆様にはこの「ニュースレター」をお配りさせていただいております。開いていただくとセンターが行っている事業をご紹介させていただいております。自然共生、共生教育、まちづくり、グローカル、このような部門で地域と共に、例えば今月ですと、「星空観察会」をしたり、「ムササビ観察会」、無人駅での子ども達の居場所づくりをしたりといった事業を展開しております。その他にも地域のボランティアのマッチングを行うなど地域とのつながりを数多く教職員と一緒にしております。年に1回本日のような形でフォーラムを開催しております。毎年1つのテーマについて、会場の皆様と共にこのような学びの場を提供させていただいております。今回のフォーラムは19回目になりますが、本日は東京都の小平市で1978年から「ゆうやけ子どもクラブ」と称しまして、発達障害や自閉症といった障がいを持った子どもたちの居場所づくりをされている皆様のご紹介とクロストークを予定しております。普段私たちが気付かないそういったところがあるかもしれませんが、子どもたちの視点から私たちに多くの気づきをいただくものと思っております。本日のコーディネーターは、本学校教育学科の佐藤比呂二先生をお願いしております。また、現地から特定非営利活動法人あかね会理事長の村岡真治様をお繋ぎしまして後半は皆様のご質問等を基にクロストークを予定しております。本日少々長い時間になりますが、皆様と共に良い時間が作れますことを期待しております。どうぞよろしくお願いいたします。

佐藤先生

こんばんは、皆様本日はお疲れのところお集まりいただきありがとうございます。ご紹介いただきました、学校教育学科の佐藤比呂二と申します。「ゆうやけ子どもクラブ」は放課後のデイサービスなのですが、45年前に障がいのある子ども4人と数人のボランティアが遊びの会を始めて、それがきっかけで今や第1、第2、第3まである事業を進めているところになります。何より子供一人一人のことを深く理解するところから始まります。映画を見ていただけるとわかるのですが、子どもたちが楽しんでいる活動を作り出して、それをきっかけに他者と繋がるなど、そういった豊かな生活作りということをやっています。子どもの内面をととても大事にしている方たちとの関わりをぜひ皆様に見ていただきたいと思っております。「ゆうやけ」の職員さんは実践記録などもすごく丁寧に作成し、皆で学びあったりしているのです。私もついこの間学習会に参加したのですが、「ゆうやけ」の職員の実践記録の一部をご紹介させていただきます。【特別支援学校小学部1年の知的障害がある「しょうきち君」はものを出せとうるさいくらいに職員に求めた。例えば「風船貸して」と言ったときに「無いよ」と答えると「見てきて」と指導員を用具室に押し込み「やっぱり無かった」と答えると「イヤー」と大声を出して叩いてきたり噛もうとしたり。かといって風船をすぐに出してくれば「もっと出して」と言い、もう1つ出すと「10個出して」と言い、「そんなに無いよ」と答えるとやっぱり「イヤー」と大騒ぎ。頭ごなしに否定されても収まらず、すんなり応じられても歯止めがきかない。そんなしょうきち君がある日「電車の本コピーして」と求めてきた。職員さんは考えた。さてどうしよう。求めに直接的に応じるのではなく、間合いを楽しんでみようかな。そういえばしょうきち君はこの間、怖いもの見たさで節分の鬼に興味が

ある。そこで言った「分かった、コピーの鬼さんに聞いてみるね。」と受け止めて、即興でコピーの鬼さんから手紙を書いてみた。『コピーが欲しければお供え物を持ってこい。』『え、お供え物?』しょうきち君の心が動いた。すかさずそばにいた職員が動いた。「よし、お供え物を作ろう。」と誘ってみたらのってきた。どんなお供え物がいいかなと二人で一生懸命考えて、鬼はきっと武器が喜ぶんじゃないかなと段ボールとガムテープで空気砲を作って、喜んでもらいたくてリボンまでかけて持ってきた。このような関りを日々重ねて、今しょうきち君は思い道理にならないときは「ん～今日は我慢」と自ら言うようになった。大人に無理やり我慢することを強いられたからではないのです。自分で我慢できる自分のことを選び取った姿だと思うのです。子供は自ら気持ちを動かして納得しながら育つ、そのプロセスを豊かにする大切さをしょうきち君が教えてくれる。】こんな実践記録を職員さんが書いてくれています。「ゆうやけ」の暖かくて丁寧でとことん子どもに寄り添うそんな実践の一コマでした。それでは映画を始めたいと思います。ぜひ画面の中に身をゆだねて子どもたちの心の動きを心のままに感じてほしいと思います。終わってからは先ほど紹介にありましたが、村岡真治さんとオンラインでつなげてお話を伺うことができます。多分今も子どもたちとわちゃわちゃやっているとと思いますが、村岡さんは映画を見ているとなんかあの怪しいおじさんとすぐにわかるとと思います。クロストークではぜひ皆様からのご質問を直接聞き合う時間を用意しておりますので、よろしく願いいたします。それでは私からは以上となりますので、ぜひ映画を楽しんでください。

～「ゆうやけ子どもクラブ」映画上映～

事務局

上映は以上で終了となります。その後10分間休憩をいただきたいと思いますので、20時20分になりましたらクロストークを始めますので、20分にはご着席をお願いします。

～休憩～

佐藤先生

ではそろそろお時間になりましたので、再開したいと思います。映画の前に怪しいおじさんなんて私言ってしまったのですが、あれは誉め言葉なんです。子どもたちと関わっているときは怪しいおじさん。映画をご覧になったら、本当に子どもたちへの愛とか子どもへの情熱とか、「ゆうやけ」を守りたい熱意とかが伝わったのかなと思います。この後は15分ほど村岡さんからお話をいただいて、そのあと皆様から頂いた質問でクロストークを進めさせていただきますと思います。では村岡さんの方からお話を始めていただいてもよろしいでしょうか。

村岡さん

よろしくお願いします。

佐藤先生

では村岡さんよろしく願いいたします。

村岡さん

皆様こんばんは、本日は遅くまで残っていただき大変ありがとうございます。ゆうやけ子どもクラブという東京の小平市という所で、映画で見ていただいたように知的障害や、自閉症などの子どもたちが中心に来ている放課後デイサービスという国の制度で行っている事業所の職員です。今日ご覧いただき本当にありがとうございます。また、このような上映会を企画していただいた都留文科大学の関係者の皆様にも心からお礼を申し上げます。最初にお伝えしないといけないのですが、この映画を作られた井手洋子監督なのですが、今年の8月13日に急に亡くなられて、間質性肺炎というご病気でした。68歳という大変若くして亡くなられました。とても残念に思っております。井手監督がいらっしゃらなければこの映画は決して出来ませんでした。本当にありがたいなという思いが募っており、心からご冥福をお祈りしております。今日はこの映画ができる経過を少しお話をさせていただきます。「ゆうやけ子どもクラブ」は1978年にできましたので、2018年に40周年を迎えまして、今年は45周年になります。40周年には記念にコンサートを開催しまして、コンサートの中で短い動画を映して「ゆうやけ」の紹介をしたいと思ったのです。その短い動画を誰に作ってもらおうかと考え、知り合いから紹介を受け井手洋子監督に初めてお会いしました。いろいろと喋っているうちに話がだんだんと膨らみ、コンサートの時だけで使うのではなく、その後もずっと使えるものにしたいという話になりました。それから単に「ゆうやけ」を紹介するのではなく子供たちが育っている姿を捉えたいとおっしゃられました。それから教材みたいなものではなく鑑賞に堪える作品を作りたい。なおかつ子どものことだけでなく、子供を取り巻く大人の奮闘にも取り組みたいと話されました。最後に映画を作る覚悟はありますか。と聞かれました。どんどん話は膨らみ、ついに映画を作ることになったんだと思いました。ただ、覚悟といわれても何のことだかわからず、聞くところによるとドキュメンタリー映画を作るにあたり最低でも何百万かかるといわれるので、資金作りの覚悟はあるのですかと聞かれたと思ったんです。覚悟はありますと言わないと作ってもらえそうになかったのです。思わずありますといったわけです。そんな形で2017年から2018年にかけて撮影が始まりました。大人はカメラを向けられるとなんだか緊張して動きがぎこちなくなるし、子供は物珍しく思ったのかカメラをいじったりマイクをいじったりしまして、まったく撮影が進まなかったのです。なおかつ子どもは走り回るので、子どもが走っていくとカメラマンと井手監督が一緒になって走っていく。そのうちカメラマンが躓き転ばれたのですが、流石はカメラマンだと思ったのがカメラだけは上に持ち上げて壊れないようにしていました。ご自分は頭を地面に打ち付けられて、額から血を流しながら引き続き撮影をされていました。それで私は思わず「大丈夫ですか」と声をかけたのですが、そうしたらカメラマンが「こんなことはよくあることだ」とおっしゃられました。せっかく心配して声を掛けたら逆に怒られました。撮影というのは体を張った仕事なんだと痛感しました。そうやって撮影が終わったのですが、今度は編集作業があります。膨大な映像記録の中からどこをどうやって切り取って構成するか、ということを試写を繰り返しながら長時間議論しました。井手監督と議論する中で学んだことが二つあります。一つは映画の中でガク君という自閉症の小学部五年生の男の子が出てきたと思いますが、井原という女性職員におんぶされて散歩するシーンが長いんですよ。皆様もご覧になって長いと思われたかもしれませんが、延々とおんぶし

て散歩しているシーンになりまして私も井手監督に「これ長いんじゃないでしょうか」と言ったのですが、そしたら井手監督が「ガク君はおんぶされながら風の感触を味わったり、小川の音を聞いたりしながら、そうやって気持ちを解きほぐしながら生活しているんだ、というとても大事な場面だから残したい」と仰られた。私はそうなのだと気づかされました。ガク君という子がどのような子かという、自分の思いと現実がぶつかると思うくらい噛みついていたりする子でした。井原という職員におんぶしてもらうのも、そういう不安があまりにも強いので体ごと受け止めて欲しくてそれでおんぶしてもらっているのだらうと思っていました。井手監督の話を聞くと、それプラス屋外に出て風の感触を感じたり小川の音を聞いたりして、そうやって気持ちを解きほぐしているんだということもあるんだと思ったのです。不安を受け止めてもらいつつ、気持ちを外に向けてほぐしていくという二つの意味があって、おんぶで散歩をしているということをつかたりしました。もう一つ教えられたのが、ガク君が駅前のほうに走っていくシーンがあるのですが、駅前にパン屋さんがあり本当はパン屋に入りパンをつかんで食べたいのですが、その時パン屋の前で立ち止まって中には入らないんです。それでどうしたのかというと、井原という女性職員の背中にぼーんと乗っておんぶしてもらったのです。その映像の場面はもう忘れられしまったかもしれませんが、おんぶをした後に「あっち」と指差しをしている場面が映画の中にあったのですが、この指さした場所は公園がある方向でした。本当はパン屋に入ってパンを食べたいのですが、やめて公園に行こうかと思い直しました。これをすごいなと思ったのが、見事に映画の中で写し取られていました。単におんぶしてもらうことが不安を受け止めてもらう背中だけではなく、本当はこうしたいけど、でもやめておこう。と自分の気持ちを切り替えるそういう支えにもなる背中にもなってきたんだとガク君の成長を気付かされたということがあります。子どもは依存しつつ自立するのだなと思います。現在、ガク君は高等部1年生になって、全くおんぶなしで生活しております。そんなこんなで映画の編集作業が終わりました。そうしたら今度は宣伝や配給という作業がありました。映画館で上映してもらうにしても、映画館と交渉しなくてはなりません。そういったことを監督中心に延々と行いました。そのおかげで2019年から全国の映画館で上映されました。東京・横浜・名古屋・大阪・神戸・京都・前橋・佐賀・大分・鹿児島・広島・沖縄・熊本・金沢・新潟・福岡・札幌と同じ地域で何館も上映されたところもあります。なおかつ全国各地で自主上映会が開かれました、本日もこのような形で開催していただきました。映画を見られた方から感想がたくさんたくさん寄せられました。その中にはこのような感想もありました。【これまでは電車の中で奇声を上げている子を見るとイライラしていたが、この映画を見てからはそういう子がいると愛おしくなった。】という感想がありました。本当に映画の力というのは大きいと感じました。こういう子の外側に見えるものだけではなく、その子が内側に持っているような悩みみたいなものを掴めるようなそういう映画だったと思います。ドキュメンタリー映画って何かとは、この間井手監督とお付き合いさせていただいて、私も学ばせていただきました。ほっとくと日々消え去ってしまうような小さい小さい人間ドラマみたいなものがたくさんあるんです。それが消え去ってしまわないうちに記憶してみんなが見れるものに残していくということが、とても大事なことだと思いました。こういう仕事をされているということをお教へもらいました。人間を大事にするような人達が寄ってたかって撮影・編集・上映していく、そういう人間としての総合力のような塊としてこういう映画ができていんだなと思っています。今になって井手監督と初めてお会いした時のことを思い出してみますと、最初に覚悟はありますかと聞かれたのは、当然資金作りの覚悟はあるかということも含まれていたとは思いますが、それだけで

はなく、撮影・編集・上映のこの全プロセスを途中で投げ出さないで最後までやり遂げる覚悟はあるのかということを問われていたんだなと思っています。井手監督からは、人間として豊かに生きていく心を後世の人にちゃんと伝えていかななくてはならない、という覚悟があるということを教えてもらったと思っています。今日は遅くまで残っていただき、本当にありがとうございます。話は一旦終わらせていただきます。

佐藤先生

村岡さんありがとうございました。皆様どうでしょうか。村岡さんの話を聞くと「あ、さっきのあの場面もう一度見てみたいな」という風に思いませんか。安心してくださいDVDになったんですよ。皆さんDVDを買ったら何度も見直して、何回も見るたびにいろんな気づきがある、そんな映画かなと私も思いますので村岡さんありがとうございます。ではこの後は、時間が限られていますが、せっかくなのでフロアからご質問をいただいているので村岡さんとのクロストークに入っていきたいと思います。

村岡さん

よろしく願いいたします。

佐藤先生

まず、いただいている質問は、社会福祉協議会の秋山さんからいくつかご質問をいただいておりますが、その中から1つ質問していただきお時間があれば改めてお聞きしたいと思います。では、秋山さんよろしく願いいたします。

都留市社会福祉協議会 秋山さん

初めまして、都留市社会福祉協議会で社会福祉士とボランティアコーディネーターをしています秋山と申します。本日は貴重な映像を見せていただき本当にありがとうございました。いくつか質問をしたいことがあるのですが、まずは感想を述べさせていただければと思います。私も先ほどの説明にあったようにガク君のシーンが一番印象に残っております。無言のコミュニケーションといいますか、すごく考えさせられるものがありました。あとは、長い目で見る必要があるのかなというところで、障がいの分野はすぐに解決することはほとんどなく、大体の事例が長く見てもいい方向行くというのはなかなか無く、映画の中でマイムマイムに参加したところとかはすごくよかったと思いました。ああいうこともあるだと見れてよかったと思います。それでは質問なのですが、今回見ていて思ったのがマンツーマンで関わっているシーンが多かったと思うのですが、その際の職員はどのくらいの人数でやられていたのかということと、子どもたちは見ていなくてもそれぞれで遊んでくれる子が集まっているのか、それとも一緒に関わりつつ遊ぶという形になっているのかをお聞きしたいと思いました。

村岡さん

職員については、大体子どもが10人いると6,7割くらいだと思います。時間割も一クラス少人数の2,3人で何コマかやれば10人くらいでやることもあります。うちは同じ子がずっと同じ時間で最後までいます。特に遊びや生活とかは見えていただけたらいいのですが、子どもから出発した遊びとか生活をどう工夫するかはこちらの実践の感どころみたいなのところが

あります。なので、子どもから出発して遊びとか生活を作るとやはりそのぐらいの割合の人数がいます。では、バラバラにやっているかと言われるとそうでもなく、不十分ながら話し合いなどを行っています。経験も違うし、非常勤の方や常勤の方もいらっしゃいますので、なかなか一緒に時間を共有して話し合うこと自体が大変苦勞します。なので、量より質だと思って、話し合うときは子どものことで様々な情報共有を行い話し合っています。一人だけのことをそのまま羅列すると聞いているほうも話しているほうもキツイですが、子どもの悩みの背景にあるようなことを汲み取るような話し合いをしたいと思っています。そうすると問題だらけの子がいとおしくなってくるんです。ガク君も叩いたり、噛みついたりするんですが、ああこんな風なことで悩んでいた子なんだ、こんな風に願いをもって生活している子なんだと分かってくるといとおしくなってくるんです。いとおしくなれるような話し合いになるように気を付けています。

秋山さん

ありがとうございます。すごく勉強になりました。またお時間がある際に職員のメンタルケア等についてお聞かせ願えればと思います。それはまたの機会にお電話などでお伺いさせていただければと思います。よろしく願いいたします。

佐藤先生

ありがとうございます。あと一般の方から2名ご質問いただいていて、お名前がないので代わりに読ませていただきます。職員の方たちが子どもと接するときに共通して意識していること、そしてそれを村岡さんがどのように伝えているか、今のお話の中にあったことかもしれませんがお聞きしたい。ということと「ゆうやけ」の職員はどんな方たちがそこで働いているのか、あと今日の映画を見てあれだけ子どもを受け入れるということは体力的にも精神的にもキツイのではないかと等そのあたりのことをお聞きしたいと質問が出ておりますが、どうでしょうか。

村岡さん

大変大事な質問だと思います。「ゆうやけ」にまりなという小学部2年生のダウン症の女の子がいます。この子が公園に遊びに行くと時間になって帰らなくていけない時に、「もう帰るよ」と職員が言うと、滑り台に上って「うー」とストライキを起こすんです。必ず行動の切り替えでもつれるんです。まりなに限らず行動の切り替えが難しい子が「ゆうやけ」には何人もいます。先ほどお話しした、あまり回数は多くないですが職員間で常勤、非常勤合わせて話し合いをするときに切り替えが難しい子はどうしようかと話し、それぞれ経験談を披露するんです。切り替えが15分かかる子だったら15分前から帰るよと声をかけたりしたという話もありました。結論はまとまらなかったのですが、子どもは切り替えるのにエネルギーを必要とする存在なんだ。だから支えてあげないといけないと大雑把にまとめました。そうしたら、その話し合いに出ていた、「ゆうやけ」にアルバイトとして3ヶ月くらいしかたっていない大学1年生の学生が、次にまりなが公園に行った際に、滑り台に上って降りてこない時にその学生さんがたまたま足元に落ちていたドングリを拾って「あ、ドングリだ」とまりなに聞こえるように言ったんです。そうしたらまりなが走ってきてドングリを見に来たんです。学生さんが「このドングリをゆうやけに戻ってゆうき君にあげようか」とまりなに渡しました。そうしたらまりなが「うん」と言って、公園にバイバイして「ゆうやけ」に

帰ってきたんです。そのことを後で皆が話を聞いてすごいなとびっくりしたんです。全く経験も少ないし障がい児教育を知らない人でも、子どもが切り替えにエネルギーを使うから支えてあげないといけないということを話し合っていたので頭にあったんだと思います。尚且つ、ドングリをたまたま見つけたのですが、ドングリは学生さん自身も好きだったそうですが、子どもも好きなんじゃないかと閃いたそうです。また、まりなは「ゆうやけ」でゆうき君とよく遊んでいたのを思い出して、「ゆうやけ」に帰ろうと言わずにゆうき君と遊ぼうという言い方で渡すと心が動くかもしれないと思ったらしいです。おそらくゆうき君とまりなが遊んでいるイメージが頭にあったんだと思います。だから思わずゆうき君に見せてあげようという言葉で出てきたんだと思います。そういうなんて言うのか、子どもと一緒に心をシンクロさせて、子どもの心が動くように支えてあげる。それは、無理やり体を引っ張って帰らせるようなこととは違い、一緒に楽しみながら行動を作っていこうということだったんだなと思いました。なので、子どものことで話し合うというのは少し工夫がいると思っています。先ほども言ったのですが、ダメなこととか、悪いことを羅列して確かめ合ってもしょうがないので、どんな願いが込められているのかをみんなで想像しあって、そのためには結論は出なくともみんなで考えあって、子どもと一緒にどんな風に行動したほうが良いかお互いに自分が接している子どもを通じてイメージし、分かち合うような子どもの育ちを楽しみ、面白がり合うような職場の雰囲気作りを私は大事にしようと思っています。お答えになっているかどうかわかりませんが以上です。

佐藤先生

ありがとうございます。映画の中でも記録を5年くらい廻りながら意見を出し合ったり、あのような話し合いがあるからこそ生活を共にする中での気づきだったり、意識して関わるといようなこと、それが子供の心を動かす瞬間につながるのではないかなと思います。ありがとうございます。こんな風に子どもの実際の姿を出してくれるので、村岡さんには感謝しています。次は学生さんからで、こちらもお名前がないので代わりに読ませていただきます。運動会やお菓子ネックレスを作っているときお母さんたちがとっても楽しそうだったのが印象的でした。子ども達だけではなくお母さんたちと接するうえで気を付けていることがあれば教えてほしいとのことです。よろしくお願いします。

村岡さん

こちらの質問も基本的には職員同士の関係と通じています。保護者の方と話し合うときに、子どもの悪い話をそのまま伝えないようにしています。叩いたり噛んだりすることは結構ありますが、そのまま伝えるのではなく自分の気持ちがもやもやしててそうせざるを得なかったけれども、例えばおやつのおかわりがもらえなかったときにモヤモヤして噛んじゃったとかは、おやつのおかわりが欲しいという気持ちをそうやって表せるようになってきて、でも無制限に出すわけにはいかないからお煎餅を半分だけ割って渡して「こっちの半分は村岡さんが食べてもいい」と聞くと「うん」って言ってくれたよとか、問題を起こしてしまう子ども次の育ちの芽生えみたいなものを、肯定的な所を汲み取ってあげてその部分こそを返してあげる。あるお母さんから「『ゆうやけ』の職員さんと話すのが気持ちが楽になります。」と言われたことがあります。自分の子どもの良いところを話してくれるからだそうです。先ほどお話ししたようによくないところもありますが、その中でも人間的な肯定的な願いを汲み取ってなるべく伝えるようにしております。そうすると私の気持ちも楽になって

家に帰ってからリラックスできるんですと言われます。そうしたら私のリラックスした気持ちが兄弟にも伝わって弟が「ゆうやけ」に通っているお姉ちゃんのオムツを交換してくれたんですよ、嬉しかったです。愛情は循環するんです。と言われたときはそうなのかと思いました。障がいのある子も含めてお互いのことを大事にしあうことではないでしょうか。というようなことに気を付けるようにしております。

佐藤先生

ありがとうございます。映画の中でお母さん同士があんなことあった、こんなことがあったと語り合える場というのが本当に大事なんじゃないかと思います。お時間が迫ってきてしまっておりますが、最後に一つだけ質問を読ませていただきます。学生さんからの質問で同じような活動をさせている団体と連携などはされていますかとのことです。まず私から特別支援学校の名前がいくつか出てきましたが、学校との連携をどうしているか教えていただきたいです。

村岡さん

ほかの団体との連携はあります。市内レベルもあれば東京レベルもあり、全国レベルもあります。実践の研修とかもあります。とにかく制度の条件が厳しくて、このことについて話をするとも1時間くらいかかってしまうので今回は省略しますが、行政に要望しなくてはいけないのですが、そういう要望を取りまとめて伝えていくというようなことを行っています。学校の先生とのやり取りについても話をするとも長くなってしまいますが、良好な関係をそれぞれが作っていると思います。ただし、たまに意見がすれ違う時があるのですが、そういう時こそ繋がるチャンスだと思っています。先ほどもお話ししたが、子どもはいろいろやらかす子だけでもこんな風に願っている子ではないですか、と伝えたりします。私が伝えると放課後デいの職員が物申すみたいになってしまいますが、なかなかうまく伝えられないときは親を味方につけて、お母さんやお父さんに言ってもらったりしながら先生方と話し合ったりしたことがあります。子どもをどう見るかということを中心にして、なぜ子どもを大事にするかということから出発して完結することかなと思っています。以上です。

佐藤先生

限られた時間の中でありがとうございました。皆様から頂いた質問をすべてお聞きできず大変申し訳ございません。村岡さんには仕事の後遅に遅い時間まで残っていただいて、本当に貴重なお話、一貫してとにかく子どもから出発するという子どもを中心におくということが伝わってきたかなと思います。村岡さんにどうぞ大きな拍手をお願いします。それではこれでクロストークのほうは締めさせていただきます。ありがとうございました。

事務局

村岡様、佐藤先生、今日はありがとうございました。以上を持ちまして第19回地域交流研究フォーラム及び「ゆうやけ子どもクラブ」上映会を終了とさせていただきます。最後にアンケートのご協力をよろしくお願いいたします。

Ⅲ－２．各種講座の開催

Ⅲ－２－１．都留文科大学現職教員教育講座

講座の趣旨

令和５年７月３１日（月）に、都留文科大学夏季集中講座として「現職教職員教育講座」を開催した。

この講座は、山梨県総合教育センターが開催している「中堅教諭等資質向上研修（１０年経験者研修）」の選択講座として、同センターとの共催で平成３０年度より実施しているものがある。午前の部に『道徳性の涵養』、午後の部に『教育現場におけるユニバーサルデザインの利用』の２講座を開講する形で実施している。

令和５年度は、午前の部を教職支援センターの泉宜宏特任教授、午後の部を学校教育学科の山本剛特任教授が担当し、県内各地の小中学校及び高等学校の教員から、午前の部３８名、午後の部３８名が受講した。

日程と内容

日 時：令和５年７月３１日（月）

会 場：都留文科大学 THMC 6202 教室

9 時 40 分～10 時	午前の部 受 付
午前の部 10 時～12 時	『道徳性とその涵養について学ぶ研修会Ⅰ』 講師：泉 宜宏（教職支援センター特任教授） 内容：道徳性とその涵養方法、学習指導要領の目指すところについて学ぶ。
12 時～13 時	休 憩（昼 食）
12 時 40 分～13 時	午後の部 受 付
午後の部 13 時～15 時	『教育現場におけるユニバーサルデザインの利用について学ぶ研修会Ⅰ』 講師：山本 剛（学校教育学科特任教授） 内容：特別な配慮が必要な児童生徒の特長と、授業のユニバーサルデザイン化について学ぶ。

（文責：事務局）

Ⅲ－２－２．都留文科大学子ども公開講座

「子ども公開講座」は、都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業との連携により、本学の市民公開講座の一環として、平成 25 年度から本格的に開始された。対象となるのは、放課後子ども教室に参加している小学生で、夏休み・冬休みの期間や休日に、主として大学内を会場として開催されている。

令和 5 年度は 7 月から 12 月にかけて 7 つの講座を企画し、6 つの講座を開催することができた。その状況は下記の通りである。

令和 5 年度子ども公開講座参加人数一覧

日程	講座タイトル	講師名	実施場所	参加者数
7 月 2 日 (日) 9:30 ～ 11:30	ロンドンオリンピック選手 と走ろう！ 佐野夢加のかけっこ教室	佐野夢加	体育館	11 名
7 月 29 日 (土) 10:00 ～ 12:00	陶芸教室	青木宏希 山本直紀	美術棟	12 名
8 月 10 日 (木) 13:00 ～ 15:30	人工知能 (AI) を使ってポ スターを作ろう！	野中潤	6 号館 403 教室 (THMC)	12 名
8 月 16 日 (水) 10:00 ～ 11:30	光の不思議 万華鏡やブ ラック・ウォールに挑戦し よう	三崎隆	自然科学棟	13 名
10 月 14 日 (土) 10:00 ～ 11:30	手作り石鹸やキャンドルを 作ろう	平和香子	1 号館 105 教室 (調理実習室)	15 名
10 月 14 日 (土) 13:00 ～ 14:30	手作り石鹸やキャンドルを 作ろう	平和香子	1 号館 105 教室 (調理実習室)	17 名
12 月 9 日 (土) 10:00 ～ 11:30	自然とのふれあい	北垣憲仁	大学キャンパス 周辺歩道	中止

令和 6 年度も都留市教育委員会からの要望に応じて、様々な講座を開催する予定である。

(文責：事務局)

Ⅲ－３．学部共通科目の開講

Ⅲ－３－１．「地域交流研究Ⅰ」

令和５年度の地域交流研究Ⅰは、地域交流研究の概念・理念を把握すると同時に、履修生各自が其々の関心に合わせて地域を特定し、地域交流事例を主体的に調査し報告書を作成することを目的とした。

地域交流研究の概念・理念の理解については、地理学、人類学および地域研究の文献を中心に講義を行った。行政枠や身近なコミュニティの範囲を超えて「地域」が存在していること、また「地域」というものが重層的複合的かつ可変可能な枠組みであることを理解してもらうために、オセアニアの海域を生活圏とする島嶼地域の事例をとりあげた。加えて黒人奴隷貿易の事例を通して「地域が剥奪される」とことと「地域を創出する」とことについても考察してもらった。「地域」が、〇〇市といったような所与の条件ではないこと、また「地域」が生成変化するものである点について、履修生の理解は得られたと思われる。

履修生各自の関心に沿って地域を特定して地域交流事例を調査する際には、自分の関心地域や関心事項を絞り込めずに悩む学生もいるため、グループを編成してお互いにアドバイスを出し合ったり進捗状況を紹介し合ったりする形式にし、孤立作業にならないように努めた。報告書の作成後は、グループ内でそれぞれの報告書を読み合い講評をする機会を設けた。

昨年度に引き続き、調査対象となった地域は東北から奄美大島まで日本各地におよび、海外ではニューヨークやスリランカの実例が調査対象となった。

出身地をとりあげた報告書が今年度も多かったが、旅行や滞在経験があつて関心を持った地域を対象にしたものや、地元地域と同じ課題に取り組んでいる地域を取り上げたものもあった。

風揚げ祭りと自然環境の関係や風揚げ祭りを通じた交流活動と祭の活性化に着目した浜松の実例、北海道東川町の写真甲子園を介した地域活性化事例、気仙沼復興支援事例、天然記念物の黒ウサギをとりあげた奄美大島の事例など、秀逸な調査が多かった。また、熊野古道保全、富士吉田市の恩賜林、富士河口湖の新倉掘り抜き、甲府市のワイン醸造、ニューヨークの金融都市形成プロセス、スリランカの旧紅茶プランテーションを舞台にした長屋再生プロジェクトなど、地域の歴史を振り返った調査が多くみられたのも今年度の特徴である。

履修生たちは報告書作成中にグループ内で意見交換し、書き上げた報告書をグループ内で講評しあう作業を通じて、能動的に「地域交流研究」に取り組むことができ、「地域交流」の幅広さや面白さをあらためて確認できたであろうと思う。

(文責：重富恵子)

Ⅲ－3－2.「地域交流研究Ⅱ」－生きものの地図をつくる－

地域交流研究Ⅱでは、2011年より前期に「生きものの地図を作る」をテーマに、身近に見られる生きものの分布調査を実施している。定量的な調査をおこなうことで、季節の変化にともなう生きものの動態を把握し、ここで得られた情報を地域に公開する手法を学び、生きものの地図が地域交流に果たす役割を考察することが授業の目的である。

例年、受講希望者が多いため、教室の机の数から受講生の人数を20名程度に調整している。20名ほどでツバメ、イワツバメ、ハルゼミの調査を実施した。6班(1班は3～4名ほど)にわかれて調査をするが、事前に用意した簡易図鑑を配布し、生きものに詳しくない学生にもデータが取れるように配慮している。

生きものの地図を作るにあたっては、対象とした種の識別とその生きものがいつ、どこに、どのくらいいたのかを把握することが重要になる。種名が不確かで数量的な記録を伴わないデータは情報量が乏しい。そのため、調査対象の種を正確に識別し、個体数を記録することが重要である。

この授業では野外に出て調査をすることに重きを置いている。生きものに関する知識は、本やインターネットを介して、室内に居ながらにして触れることができるが、自分の足を使って得た情報はとても大事で、直接的な多くの学びはこのような経験のなかにあると考えるからである。受講した学生には、大学周辺の身近な自然に触れ、その意味を考える時間を持ってもらいたいと願っている。

野外での調査を通して調査対象を知り、調査結果から明らかになったことを理解し、その成果を公開することには、どのような意味があるのだろうか。自分たちが行なった調査から得られた情報を多くの人々に知ってもらうための工夫の仕方、その楽しさ、重要さに実体験を通して気づいてもらいたい。

2023年は雨天のため、カエル類の調査が実施できなかった。ツバメ類やハルゼミについては、これまでの結果と大きな違いはなかった。ハルゼミはアカマツ林でよく見られるセミ類である。都留市や周辺部ではマツ枯れが進んでおり、ハルゼミの個体数の減少が予想されたが、これまでの結果はこの予想に反している。個体数への影響がすぐに出ない場合もあるため、今後もモニタリングを続けたい。希少種や外来種の分布状況についても調査を行ない、その結果を学内はもとより都留市内にも広く公開していきたいと考えている。

生物多様性の保全が国際的な課題として認識される時代であるが、その取り組みは身近な生きものへの関心がなくては始まらない。授業で生きものに触れる経験がその一助になれば幸いである。

(文責：西教生)

Ⅲ－３－３．「地域交流研究Ⅲ」

地域交流研究Ⅲは、都留市域内で行われている「地域交流」について学生自らが調べ学習することを主眼としている。令和５年度は「防災」をテーマにとりあげ、地域で取り組まれている活動を調査対象とした。

まず、防災を身近に感じてもらうために、本学を起点に音楽棟側、理科棟側、バイパスから谷村町方面に向かう３グループを編成して散策してもらった。山や丘陵との近さ、土砂崩れ防止工事、空き家や廃屋、道路状況と交通量、避難場所、学生アパートと一戸建て住宅との混在、自治会の存在、耕作放棄地、川や用水路の幅、深さ、水量などの状態、夜間照明、坂の傾斜など、防災の観点から気付いたことや疑問に思ったことは多岐にわたった。何気ない場所に様々な発見があったと、履修生にとって刺激は大きかったようで、そのあとハザードマップと照合したことにより、自分が住んでいる地区の地形的特徴を把握するだけにとどまらず、都留市全体を俯瞰しながら調査に臨むことができた。

防災というテーマで調査すべき項目を履修生たちが議論して決定し、分担して調査を実施した。調査項目は防災計画および対策、防災活動、防災教育、ボランティア活動、人とのつながりなどで、本学学生の防災意識なども関心項目にあげられていた。

履修生たちは、各調査項目に従い、市役所、大学、社会福祉協議会、教育委員会、ボランティア団体、地域の防災委員への聞き取りを実施した。また自治会が作成した地域の防災計画や市のセーフコミュニティなどの資料を踏まえて報告書を作成した。地域住民による防災訓練の実態や防災意識について調査をどうしたらいいか難題であったが、幸い、与縄地区で開催された防災訓練に参加する機会を得た。履修生たちは地区住民との交流に加えて、地域住民と市民病院や消防署・消防団、警察署、市役所との連携を目の当たりにする機会を得ることができ、極めて貴重な体験となった。

興譲館高校で実施されている災害ボランティアスクールをはじめ、学校教育現場での取り組みについての調査を通じて、特に学校教育学科の履修生たちは、将来の具体的な課題として防災を認識できたようである。またボランティア活動の調査を通じて、都留市内の複数のボランティア団体をまとめる災害ボランティアセンター運営委員会が存在し、都留市外の団体との連携もされていることを明らかにできた。地域内の交流活動が同時に地域外との交流と不可分である点を把握できたことで、地域交流への理解を深めることができた。令和５年度の地域交流研究Ⅲは、都留市総務課防災危機管理担当、地域環境課、社会福祉協議会、本学財務課、教育委員会、与縄地区の住民の皆様、いきいきサロンの皆様、他、関わっていただいた都留市の皆様の多大なご協力とご助力のおかげで、履修生にとって極めて有意義な調査を実施することができた。心より感謝申し上げますと同時に、ささやかながらも、本科目が今後も履修生の都留市理解を促進できるように努めてまいりたい。

今年度、履修生たちは終始積極的、主体的に調査に取り組んだ。防災の実態を把握するということは容易いことではないが、自分たちが直接かかわる課題として真摯に取り組んでいた姿勢が印象的であった。

(文責：重富恵子)

Ⅲ－３－４．「地域交流研究Ⅳ」―地域の自然を観察し記録する―

これまでの経緯

2020年度まで「地域交流研究Ⅳ」は、地域の自然や文化をテーマとした観察・記録を行い、それを記事にまとめるという授業をしてきた。地域での体験を言語化し、それを互いに読み合い、最終的には冊子として市民に届けることで学生の地域についての学びを深め、市民との交流を生み出すことを目標とした。この授業は、地域交流研究センターの『フィールド・ノート』の実践を参考にして行った。

2021年度から文学部3学科横断履修モデルの科目として位置づけられたこともあり、「地域を観察し記録する」という目標は保ちつつ、地域交流研究センターのフィールドでもある富士山北麓の動物を含む地域の身近な自然の理解をテーマとした授業構成とした。

今年度もキャンパス周辺でのフィールド・ワークを取り入れたため、受講者を30名に調整し授業を行った。

科目概要

地域交流研究センターがフィールドとする本学を含む富士北麓地域の自然環境を対象に、地域を理解するとはどういうことかを具体的な事例をもとに考察することをテーマとした。授業ではじっさいにキャンパス周辺の自然に触れ観察し親しむことから始め、動物の生活痕（食べ痕や糞、足跡など）から森と動物との関係性について理解を深める授業内容とした。特に全国的に農業や林業など環境面だけでなく社会的な問題にもなりつつあるニホンジカやイノシシなど大型哺乳類との共存の課題には地域住民との交流を重ね解決を図る取組が欠かせない。自然に親しみ、生きものの関係性に着目して自然の仕組みへの理解を深め、地域の自然の課題を市民との交流を通して解決していくにはどうしたらよいかを考察することに重点を置いて授業を展開した。また、本授業での経験を含めた自然への理解を、卒業後の生活にも活かせる「生きた学び」、つまり地域の中での事象や活動に直接触れることで、地域・技能を生活の中で活かすことができる学びを体験し、学びを深めることを目指した。

授業後、次のような感想が寄せられた（一部抜粋）

- ・ フィールドワークを通して実際に自分の目で地域の自然を見ることができてよかった。
- ・ 今期、履修していた科目と共通する学びがあり、より深い学びとして生物多様性について考えることができました。
- ・ 自分たちの身のまわりにある自然を普段は気にすることもなかったが、授業を通して植物や動物、環境の仕組みの解像度を高くすることができた。
- ・ 実際に歩いて観察したり森の中に入ってリアルを見れたことが良かった。
- ・ 新しく学べる事が多かった。普段、目を向けない小さな視点や大きな視点に目を向けて、人と環境、生きている世界を考えるとこれからどんな世界で生きていきたいか考えられるようになった。
- ・ 山のなかでのフィールドワークが新鮮でとても楽しかった。
- ・ 写真や言葉だけでなく実際に自然、生きものを目にする機会があったことがよかった。
- ・ フィールドワークを取り入れることで、生きものへの理解が深まりました。また何より愛着がとても湧きました。
- ・ 実物を目で見て理解しやすくなり、より意欲が湧きました。

来年度（2024 年度）もキャンパス周辺でのフィールド・ワークを取り入れて授業を実施する予定である。受講生のなかにはフィールド・ワークをするにはまだ受講者数が多いように思うという感想も寄せられている。できる限り多くの学生の受講希望を受け入れながら、より身近なキャンパス内の自然についても授業で扱えるよう準備をしたい。

（文責：北垣憲仁）

Ⅳ．地域貢献活動

Ⅳ－１．山梨県南都留地域教育フォーラム

概 要

南都留地域教育フォーラムは、「地域の子どもたちは、地域で育てる」という基本理念のもと、この地域の教育関係者が一堂に集まり、『連携活動』『交流活動』を軸に、報告と意見を述べあう場として開催されている。毎年、教育委員会・校長会・教頭会のほか、各学校・幼稚園・保育園やPTA及びPTA連絡協議会、保育所保護者会、青年会議所、商工会議所、商工会など数多くの団体の参加者によって、様々な立場からの意見交換を行い、今日的な課題への対応や解決を目指す機会となっている。

令和５年度は１１月１０日（金）に参集型で開催された。全体会と２つの分科会を実施し、６つの実践提案とパネルディスカッションを行った。第一大分科会では、「誰一人取り残されない教育」のテーマで、山中保育所と、谷村第一小学校、ひばりが丘高等学校から３つの実践提案が行われた。第二大分科会では、「地域との連携」のテーマで、富士河口湖町立教育センター・富士山科学研究所・富士河口湖町地域防災課、吉田小学校、吉田高等学校から３つの実践提案が行われ、その後のパネルディスカッションでは活発な意見交換が行われた。

令和５年度「南都留地域教育フォーラム」全体会テーマ一覧

全体会 「子供たちの教育は地域 全体で担う」 ～みんなで育む地域連携・ 地域交流～	第一大分科会 「誰一人取り残されない教育」 ～支援を要する子どもへのアプローチ～ ・山中保育所 所長 大森江身子 ・谷村第一小学校 教諭 中野 恵子 ・ひばりが丘高等学校 教諭 渡辺 孝太郎 助言者：堤 英俊（学校教育学科准教授）
	第二大分科会 行政・外郭団体と小中高の連携 ～小中高の子どもたちを中心に～ ・富士河口湖町立教育センター センター長 藤巻 桂吾 富士山科学研究所 研究員 久保 智弘 富士河口湖町地域防災課 防災係 小佐野 正吉 ・吉田小学校 教頭 小俣 善美 ・吉田高等学校 教頭 野澤 俊英 助言者：廣田 健（学校教育学科教授）

（文責：事務局）

Ⅳ－２．都留市放課後子ども教室事業

１．「都留市放課後子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成 16 年度）および「地域教育力再生プラン」（平成 17・18 年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども教育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会生涯学習課が事務局を担って実施している事業である。6 つの小学校区（谷村第二、東桂、宝、禾生第一、禾生第二、旭）を中心に、学校の図工室や、各地区のコミュニティセンター等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの活動を行っている。

２．令和 5 年度の活動状況

地域交流研究センターでは、都留市教育委員会からの依頼を受け、活動指導員として協力してくれる学生を募集している。平成 27 年度までは、個々の活動ごとに募集をかけて学生が直接申し込む形式だったが、申し込みの多い活動と、少ない活動に分かれてしまい、調整が難しかった。

そこで平成 28 年度からは、センターが活動指導員として参加を希望する学生をあらかじめ募集して登録を行い、申告してもらった特技や趣味等から、個々の活動の際に教育委員会が適当な学生に直接参加を依頼する、という方法を取るようになった。

令和 5 年度は 47 名の学生から参加申し込みがあり、放課後子ども教室事業で行われた 184 回の活動のうち 41 回の活動に延べ 155 名の学生が参加し、子どもたちをサポートした。

令和 5 年度放課後子ども教室学生参加状況一覧

「三吉子ども体験教室」（谷村第二小学校）

	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
1	7 月 2 日	文大子ども公開講座（1～3 年生） ロンドンオリンピック選手と走ろう 佐野夢加のかけっこ教室！	都留文科大学	2 名
2	7 月 14 日	自由遊び	都留文科大学	1 名
3	8 月 9 日	つるっ子探検隊の夏祭り	体育館	12 名
4	8 月 10 日	文大子ども公開講座 人工知能（AI）を使ってポスターを作ろう！（4～6 年生）	都留文科大学	1 名
5	8 月 16 日	文大子ども公開講座 光の不思議 万華鏡やブラック・ウォールに挑戦しよう！	都留文科大学	
6	9 月 19 日	山歩き 🍁 秋の七草を見つけよう	谷二小～都留 CC ～ 引野田	3 名
7	10 月 14 日	文大子ども公開講座（1～2 年生） 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	11 名

8	10月14日	文大子ども公開講座（3～6年生） 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	11名
9	10月18日	自由遊び	体育館	1名
10	12月15日	運動遊び	体育館	1名
合計①				43名

「桂子ども教室」（東桂小学校）

	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
1	5月20日	にじいろきょうしつ 【文大生と工作遊び】	東桂小体育館	8名
2	6月28日	おもいきり遊ぼう！～運動遊びを」楽しもう！！～（学童合同活動）	東桂小体育館	3名
3	7月2日	文大子ども公開講座 佐野夢加のかけっこ教室	都留文科大学	2名
4	7月13日	トイレットペーパー芯ロケット （学童合同活動）	都留文科大学	2名
5	7月15日	にじいろきょうしつ 【文大生の大型紙芝居読み聞かせ】	東桂コミセン	7名
6	7月29日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	5名
7	8月10日	文大子ども公開講座 人工知能（AI）を使ってポスターを作ろう！	都留文科大学	1名
8	8月16日	文大子ども公開講座 光の不思議 万華鏡やブラック・ウォールに挑戦しよう！	都留文科大学	
9	8月21日	アイスの棒工作（学童合同活動） アイスの棒工作（学童合同活動）	東桂学童教室	2名
10	9月26日	おもいきり遊ぼう！～運動遊びを楽しもう！！～（学童合同活動）	東桂小体育館	1名
11	10月14日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	11名
12	10月14日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	11名
13	11月22日	おもいきり遊ぼう！～運動遊びを楽しもう！！～（学童合同活動）	東桂小体育館	2名

14	11月25日	宇宙教室 天体望遠鏡で月を見よう！！ (宝小合同活動)	宝小体育館 宝小グラウンド	3名
15	12月14日	宇宙教室 ふたご座流星群天体観測 (宝合同活動)	東桂小体育館 東桂小グラウンド	1名
16	12月25日	ビーズのクリスマスリース (学童合同活動)	東桂学童教室	2名
		ビーズのクリスマスリース (学童合同活動)		
17	1月13日	にじいろきょうしつ 【文大生とクッキング】	東桂コミセン	9名
合計②				70名

「宝っ子クラブ七里」(宝小学校)

	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
1	7月2日	文大子ども公開講座 佐野夢加のかけっこ教室	都留文科大学	2名
2	7月24日	ゴミからアートへ ～ダンボールコラージュの制作～① (学童合同活動)	宝小体育館	2名
3	7月26日	芸術はばくはつだ！ ～ワイヤーにちょうせん～①	多目的ホール	1名
4	7月28日	ゴミからアートへ ～ダンボールコラージュの制作～② (学童合同活動)	多目的ホール	2名
5	7月29日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	5名
6	8月3日	芸術はばくはつだ！ ～ワイヤーにちょうせん～②	多目的ホール	3名
7	8月10日	つるっこ探検隊 【びしょぬれ！！水遊び！！】 (学童合同活動)	宝小グラウンド	10名
8	8月10日	つるっこ探検隊 【びしょぬれ！！ペットボトルロケット】 (学童合同活動)	多目的ホール中庭	10名
9	8月10日	文大子ども公開講座 人工知能 (AI) を使ってポスターを作ろう！	都留文科大学	1名

10	8月16日	文大子ども公開講座 光の不思議 万華鏡やブラック・ウォールに挑戦しよう！	都留文科大学	
11	8月17日	都留文大こまつり企画【ミニこまつり】	多目的ホール 1年教室	6名
12	10月14日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	11名
13	10月14日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	11名
14	11月8日	お花の寄せ植え	多目的ホール 中庭	1名
15	11月25日	宇宙教室 天体望遠鏡で月を見よう！ (桂合同活動)	宝小体育館 宝小グラウンド	3名
16	12月14日	宇宙教室 ふたご座流星群天体観測 (桂合同活動)	東桂小体育館 東桂小 宝小グラウンド	1名
17	12月26日	都留文大こまつり企画【いろいろドッジボール】(学童合同活動)	宝小体育館	4名
18	1月10日	宝の山の番長と遊ぼう！ (学童合同活動)	宝小グラウンド	2名
合計③				75名

「禾一わくわくクラブ」(禾生第一小学校)

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	7月2日	ロンドンオリンピック選手と走ろう！ 佐野夢加のかけっこ教室 (3～6年生)	都留文科大学	2名
2	7月29日	陶芸にチャレンジ！ (4～6年生)	都留文科大学	5名
3	8月10日	人工知能 (AI) を使ってポスターを作ろう！ (4～6年生)	都留文科大学	1名
4	8月16日	光の不思議 万華鏡やブラック・ウォールに挑戦しよう！	都留文科大学	
5	10月5日	俳句かるたで遊ぼう (1～3年生)	禾生コミセン2階	2名
6	10月14日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう (1・2年生)	都留文科大学	11名
7	10月14日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう (3～6年生)	都留文科大学	11名
8	10月23日	自由遊び	禾一小グラウンド	1名

9	1月10日	つるっ子探検隊 大きなかるた大会 (旭・禾一合同)	禾一小体育館	12名
10	1月17日	昔の遊びを体験しよう	禾一小図工室	1名
		合計④		46名

「禾二っ子クラブ」(禾生第二小学校)

	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
1	7月2日	ロンドンオリンピック選手と走ろう！ ～佐野夢加のかけっこ教室～	都留文科大学	2名
2	7月29日	陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	5名
3	8月10日	人工知能（AI）を使ってポスターを作ろう！（4～6年生）	都留文科大学	1名
4	8月16日	文大子ども公開講座 光の不思議 万華鏡やブラック・ウォールに挑戦しよう！	都留文科大学	
5	10月14日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（1・2年生）	都留文科大学	11名
6	10月14日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（3～6年生）	都留文科大学	11名
		合計⑤		30名

「旭子ども教室」(旭小学校)

	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
1	5月10日	とうもろこしの苗植えと種まき	盛里コミセン裏の畑	3名
2	6月7日	自由遊び	学童の教室	2名
3	6月21日	スライム作り	盛里コミセン別館	4名
4	7月2日	ロンドンオリンピック選手と走ろう！ 佐野夢加のかけっこ教室（3～6年生）	都留文科大学	2名
5	7月29日	陶芸にチャレンジ！（4～6年生）	都留文科大学	5名
6	8月10日	人工知能（AI）を使ってポスターを作ろう！（4～6年生）	都留文科大学	1名
7	8月16日	文大子ども公開講座 光の不思議 万華鏡やブラック・ウォールに挑戦しよう！	都留文科大学	
8	10月14日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（1・2年生）	都留文科大学	11名
9	10月14日	手作り石鹸やキャンドルを作ろう！（3～6年生）	都留文科大学	11名

10	10月18日	俳句かるたで遊ぼう	盛里コミセン別館	3名
11	11月1日	防災のお話	盛里コミセン別館	3名
12	1月10日	つるっ子探検隊 大きなかるた大会 (旭・禾一合同)	禾一小体育館	12名
	合計⑥			57名

(① + ② + ③ + ④ + ⑤ + ⑥) 合計⑦	321名
-----------------------------	------

(文責：事務局)

Ⅳ - 3. 文大ボランティアひろば

1. 文大ボランティアひろばとは

文大ボランティアひろば（通称：ボラひろ）とは、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との話し合いの中から生まれた「ボランティアをとおして交流できる場」のことである。平成 20 年度から 1 ヶ月に 1 回のペースで開かれており、本学のボランティアサークルを中心に、地域交流研究センターと社会福祉協議会の職員やボランティアの協力を呼びかけたい地域の方が参加して、緩やかな連絡協議会的な会合の形であったが、令和 4 年度から新たな形でボランティア事業を再始動した。地域交流研究センターに学生ボランティア登録をしてもらい、事務局からボランティア募集のお知らせや、ボランティア講座、文大ボランティアひろば開催のお知らせを随時メールにて周知した。学生は参加したい時に申し込みを行い、社会福祉協議会への登録を許可した学生については、社会福祉協議会のデータベースにも登録した。令和 5 年度の学生ボランティア登録者は 96 名であった。

「文大ボランティアひろば」については、1 ヶ月に 1 回、12 時 30 分～13 時に限定し、地域交流研究センターや社会福祉協議会からのボランティア募集の告知、登録者同士の交流する場として実施した。実施日は下記のとおりである。第 3 回からは、地域でボランティア活動をしている方にゲストとしてお越しいただき、実際に行っているボランティア活動内容の様子や、ボランティアを始めたきっかけ、ボランティアの魅力、継続の秘訣など直接話を聞くことのできる貴重な時間となった。また、11 月には学外へ出て楽山地区の清掃活動を行い実際のボランティア活動を実施した。令和 5 年度については、ボランティア事業の推進を目的として、学生のボランティア活動の活発化を図るため「文大ボランティアひろば」への参加人数の増加に力を入れて取り組んだ。令和 6 年度は更なるボランティア事業の推進について検討していきたい。

第 1 回	4 月 20 日 (木)	1216 教室	参加者 32 名 ボランティア登録、ニーズ等の紹介
第 2 回	5 月 18 日 (木)	THMC6201 教室	参加者 15 名 ボランティア登録、ニーズ等の紹介
第 3 回	6 月 8 日 (木)	1216 教室	参加者 5 名 ゲスト カメラボランティア
第 4 回	7 月 13 日 (木)	THMC6201 教室	参加者 9 名 ゲスト WakuWaku の家
第 5 回	10 月 12 日 (木)	THMC6201 教室	参加者 8 名 ゲスト こぶたの会
第 6 回	11 月 9 日 (木)	楽山地区清掃活動	参加者 20 名
第 7 回	12 月 14 日 (木)	THMC6201 教室	参加者 20 名 ゲスト あすなろ学習会
第 8 回	1 月 18 日 (木)	THMC6201 教室	参加者 10 名 ゲスト にこ研

2. 今後の課題

ボランティア登録者に対して「文大ボランティアひろば」への参加がまだ少ない現状である。ボランティア登録者はボランティア活動に関心のある学生のため、そのニーズに答えられる場として「文大ボランティアひろば」を開催していきたい。そのためにも参加人数の安定を図ることが課題となる。

(文責：事務局)

Ⅳ－４．地域交流研究センターサテライト

１．地域交流研究センターサテライトについて

平成 25 年度に都留市まちづくり交流センター内に設置された都留文科大学地域交流研究センターのサテライト（分室）である。サテライトでは地域の方々により大学を身近に感じてもらふことや、大学と市民との交流促進を図ることを目的に活動している。

２．令和 5 年度の活動状況

サテライトの主な活動は、大学と地域をつなぐ窓口として、ボランティアの募集や地域の講演会への講師派遣依頼、学生のイベント開催の支援などである。令和 4 年度の主な活動は、以下の通りである。

- ・ はつらつ鶴寿大学ボランティアスタッフ募集
- ・ 安心・安全フォーラムつる 8 月 8 日
管弦楽団によるオープニングセレモニーでの演奏
- ・ 都留文科大学文化祭アルバイト募集
- ・ マンドリンクラブ…8 月 8 日谷村地域協働のまちづくり推進会「文大生との交流会」
- ・ 吹奏楽部…11 月 11 日「東桂まちづくり文化祭オープニングセレモニー演奏」
- ・ 落語研究会…1 月 14 日「落語研究会 まち交寄席」
- ・ 茶道部…1 月 8 日「西光寺と学生交流」
- ・ つる銀河クラブと主催「子ども宇宙教室」の企画・運営

（文責：事務局）

Ⅳ－５．「学級づくりの向上をめざす実践講座」

令和５年度は、５月から１１月まで全６回の講座を開催した。

- 第１回 ５月２７日（土） 渡辺幸之助（武蔵野大学特任教授）
学級づくりの面白さと心躍る行事の意味～日本型教育とは何か
- 第２回 ６月２４日（土） 渡邊恭子（勝山中学校教諭）
学級づくりを仲立ちに教員同士が学び合う、そのための記録を！
- 第３回 ７月２２日（土） 足達亮祐（双葉西小学校教諭）
小学校低学年からの話し合い・班編成・リーダー育成を楽しむ
- 第４回 ９月３０日（土） 梶原みのり（忍野小学校教諭）
教師が変わる、子どもが変わる、特支教育から得た発想を活かす
- 第５回 １０月２８日（土） 今泉教秋（元八代小学校校長）
子どもたちの言葉から何を学ぶか～実践をもとに学び合った日々
- 第６回 １１月１８日（土） 清水英理華（双葉西小学校教諭）
自分らしく生き生きと、自分の言葉で語れる小学１年生！

令和５年度に開催された６回の講座をふり返し、改めて本講座の魅力として感じることを２つあげることしよう。一つめは参加者の数と顔ぶれである。参加人数は各回でばらつきがあったものの、６回平均１８人の参加者があった。この規模は、講師と参加者とが交流しやすい人数であり、質疑応答などが充実し、双方が学びを深めることができたと思われる。参加者の顔ぶれも、小学校・中学校・高等学校の教師、指導主事、学生・院生、研究者など多彩であった。とりわけ、ほとんどの講座に学生・院生が参加していたことは本講座の大きな魅力と言えるだろう。学生や院生にとって、本講座は、学級づくりの実践を実践者から直に聴くことができる、願ってもない機会となっている。本講座が、優れた教育実践者から学生や現職若い教師への、教育実践の「伝承の場」となっていることは明らかである。

一方、実践者にとっては、学生たちが発する素朴な問いや感想が、自分の実践を見つめ直す機会となり、また、新たな実践のヒントになっていたことであろう。その意味で、本講座は、教育実践の「ふり返し」や「創造の場」となっていたといえるだろう。

本講座の魅力の二つめは、本講座が「学級づくり」の向上をめざす実践講座である点である。教育現場での研修では、国語や算数、社会といった教科の指導や、いじめ・不登校指導など現代的な課題が取りあげられることが多い。しかし、「学級づくりがうまくいってれば何をやってもうまくいく」といわれるように、「学級づくり」がしっかりできていれば、授業も入試も合唱もうまくいく。いじめや不登校も限りなくゼロに近づくだろう。その「学級づくり」の実践を、実践者から直に学ぶことができるのが本講座なのである。

令和６年度は、６回にわたって開催される予定である。

- ①第１回 ５月２５日（土） 渡辺幸之助（武蔵野大学特任教授）
学級づくりで育む主権者意識～班、リーダー、討議で迫る実践を
- ②第２回 ６月２２日（土） 古屋壽人（船津小学校教諭）
発達・環境・個性……子どもの多様なよさを見出せる学級づくり
- ③第３回 ７月２７日（土） 梶原斉（小立小学校校長）
学校経営からふり返る学級～経営とは価値をつくり共有すること

- ④第4回 9月28日(土) 中村香子(元富士学苑中学校教諭)
学級に演劇を～課題克服のねらいをもって脚本を選び創る試み
- ⑤第5回 10月26日(土) 三浦慈(大石小学校教諭)
一人一人を見る目の深化～可能性に気づき喜べる学級担任に
- ⑥第6回 11月30日(土) 廣嶋敬正(谷村第二小学校教諭)
小4の体育科で民主主義を実体験する～みんなが楽しめるルールとは

(文責：古屋和久)

Ⅳ－6．市民公開講座

地域交流研究センターの部門活動として実施したものはⅡ．各部門の活動で、また現職教員養成講座と子ども公開講座についてはⅢ．インターフェイスとメディアの活動において報告したため、ここではそれ以外のものについて報告する。

○市民公開講座「佐野夢加 親子かけっこ教室」

【日程・会場等】

日 時：令和5年7月23日（日）9:30～11:30

会 場：都留文科大学体育館 参加者：14組30名

講 師：佐野夢加（本学特任講師）

【講座の概要】

7月23日（日）、都留市内の小学生を対象とした市民公開講座「佐野夢加かけっこ教室」を開催した。

本講座は、本学特任講師でロンドン五輪陸上競技日本代表の佐野夢加氏を講師に迎えて、平成28年度から毎年開催しているもので、今回は本学陸上部の学生2名が補助として参加した。

参加者は小学校1年生から6年生までの親子14組30名で、ウォーミングアップのランニングから始まり、ラインの上を走るライン走や、マーカー（小さな平べったいコーン）を利用したマーク走などによって、走るコツを身に着ける練習を行った。

【参加者の感想】

- ・楽しくやれていたのでもた期会があれば参加したいと思いました（1年生）
- ・体を動かしていないのでこうゆうときに体を動かせて、うれしいです。（1.3年）
- ・負けてくやしかったから又勝負したい（2年）
- ・熱中症対策が充実していてとても良かったと思います。（保護者）

○市民公開講座「英語であそぼう！」

【日程・会場等】

日 時：令和5年7月29日（土）10:00～11:00

会 場：THMC2階 参加者：15名

講 師：上原（かんばる）明子（学校教育学科教授）

【講座の概要】

昨年度に続いて、学校教育学科の上原明子教授と本学学生による市民公開講座「英語であそぼう！」を開催した。市内の5つの小学校から1年生から6年生、15名が参加して、本学の学生が講師を務める2つの教室で時間を区切って回り、ゲームやクイズに答え楽しみながら英語を学んだ。

【参加者の感想】

- ・とても楽しかったです。これからの英語であそぼうに来たいです。（3年生）

- ・いろいろなえいごがおぼえられてうれしかった。(1年生)
- ・えいごのべんきょうになりました。またきたい(2年生)
- ・まだ12から20は習っていないけど「えいごであそぼう」で覚えられてよかった。(4年生)

○市民公開講座「星空観察会」

【日程・会場等】

日 時：令和5年10月19日（木）18:20～20:50

会 場：自然科学棟 S1 教室 参加者：13名

【講座の概要】

10月19日（金）に本学非常勤講師・国立天文台特別客員研究員の古荘玲子氏と地域交流研究センター自然共生研究部門 内山美恵子教授による市民公開講座「星空講演会」を開催した。当日は、本学生及び一般の方の13名の参加があった。

望遠鏡の歴史や種類、観測予定の天体（木星、土星）についてのお話しをお聞きました。展望台及び屋上にて望遠鏡を使用して観測を行った。

【参加者の感想】

- ・大学内にあんなに大きな望遠鏡があること自体を初めて知りました。土星も木星もガリレオ衛星もしっかり見ることができました。カッシーニも見えました。今回の公開講座でカッシーニという言葉を知ったし、星がこんなにも素早く動くことも知らなかったので天体について学ぶことが多かったです。もしまた機会があれば参加したいと思いました。
- ・今まで望遠鏡で星を見たことがなかったので、あそこまで大きな望遠鏡で観察させて頂けて本当に貴重な体験でした！土星の輪と木星のしま模様が見ることができて感動しました。これから自分でもときどき星の観察をしてみようと思います！
- ・本日は、貴重な機会をありがとうございました。日常では、もちろん体験できない事で、大学に居ても自然科学棟の天文台に登ることはなかった。卒業前に、天文台に登れてよかった。土星と木星をはじめて見ることができ本当に良かったです。
- ・観察前に事前知識を共有して下さったおかげで、漠然と星を観るだけでなく、宇宙の一部として観察することができました。普段天文学に触れる機会が少ないので、専門的な話をポイントごとと聞くことができ、そして土星も木星も見れて有意義な時間となりました。

○市民公開講座「湧水さんぽ」

【日程・会場等】

日 時：令和5年10月28日（土）9:10～13:00

参加者：7名

【講座の概要】

10月28日（土曜日）に地域交流研究センター、自然共生研究部門、内山美恵子教授（学校教育学科）による都留市十日市場・夏狩湧水群を見学する市民公開講座「湧水さんぽ」が開催されました。

当日は7名の参加があり、太郎次郎滝の溶岩と湧水、十日市場の湧水を見学し、溶岩の話

や湧水のしくみなど、楽しく見学し好評のうちに終了した。

【参加者の感想】

- ・都留市の湧水について、授業で学んだことに加えて詳しく、わかりやす例などを通して教えて頂き、深い理解、正しい理解につながりました。溶岩の特徴や構造について場所ごと理解が深まりました。卒業までに都留についてもっと知っていきたいと思いました。
- ・都留に住んでいてもなかなか行く機会のなかった地域を見ることができた。富士山の溶岩や地層について、説明を聞いて、町の湧水が多い理由を知ることができた。何百年も前の噴火の痕跡がいたる所に残っていることにロマンを感じ、また、火山活動の影響を今の私たちも受けているということか身にしました。
- ・都留の知らない所を見て、逆でも楽しい一時を過ごすことが出来た。都留の地形と火山の噴火とが不可分であることを知った。単に傾斜に見える地であっても、その生成過程を知ると、土地の経た長い時間を「視る」ことが出来る様に思はれた。又、自然の物から「物語」が作られていることも知った。それが科学的な事実に反していようと、自然物に対する人々の思いを尺えたような気がした。

○市民公開講座「星空観察会」

【日程・会場等】

日 時：令和5年11月16日（土）18:20～20:50

会 場：自然科学棟 S6 教室 屋上・天文台 参加者：13名

講 師：古荘玲子（都留文科大学非常勤講師・国立天文台特別客員研究員）

【講座の概要】

11月16日（木曜日）に地域交流研究センター、市民公開講座「星空観察会」が開催されました。

当日は13名の参加があり、講師の古荘先生より望遠鏡の歴史や種類、観測予定の天体（木星、土星）についてのお話しをお聞きました。展望台にて望遠鏡を使用して観測を行いました。

【参加者の感想】

- ・天候に左右される行事なので、仕方がありませんね。だんだん雲が広がってきて、星が隠れてしまっ残念でした。ただ、いつも外から見ていたドームに入れて、ドームを動かして頂いた時は感動しました。地球の地軸の角度を改めて確認したり望遠鏡が静止しているのは、重りがあっての事など なるほどなと、思いました。最後に木星が見れて良かったです。
- ・くもりで、天気が微妙だったが木星が見えてよかった。望遠鏡には焦点によって様々な種類があることがわかった。昔の人は寒さに耐えて観測していた話がおもしろかった。大きな望遠鏡で星を見る機会はなかなかないのでより経験になった。すばるは双眼鏡で見えるとのことなので、今度みてみたい。
- ・実際に星を見るという体験に重きを置いた講座で大変面白かったです。望遠鏡の仕組みは難しいと思いましたが、様々な種類があることを初めて知りました。

○市民公開講座「光の不思議」

【日程・会場等】

日 時：令和6年1月21日（土）10:00～11:50

会 場：自然科学棟2階 参加者：15名

【講座の概要】

1月21日（日）学校教育学科 三崎隆特任教授により、新規となる市民公開講座「光の不思議」を開催した。対象者を中学生とした講座については初めての試みであったが、講座を通して本学を身近に感じてもらう進路の選択になることを目的として開催した。中学生は部活動などの理由から参加が難しいと予想されたが、市内外に幅広く周知することで定員を超える申し込みがあり、急遽定員を増やし対応した。西桂町と大月市からの参加もあり、これからの情報発信手段の開拓にも繋がった。

【参加者の感想】

- ・理科の光は苦手であり好きではなかったが、楽しく、手をうごかしながら行うことで少しりかいができた。月を見たくなった。（3年生）
- ・1,2年生のときの復習もできてよかったです。望遠鏡をつくってとても楽しかったです。また機会があればいきたいです。（3年生）
- ・光の屈折や凸レンズのことは授業で少し、知っていたけど、凸レンズを凹レンズを組み合わせても物が大きく綺麗に見えてびっくりした。（3年生）

（文責：事務局）

V. 地域交流研究教育プロジェクト

V-1. 「食育つる推進プラン」

【目的】

都留市が第6次都留市長期総合計画で策定している「健康増進計画・食育推進計画」（2016～2026年）の重点目標「健康プロジェクトTSURUつる」（旧「食育つる推進プラン」）1～9に基づき、主に最優先課題とされている1. 栄養・食育分野について、学内における学生や地域の人々への食育の周知や活動の支援を大学生が積極的に取り組み、健康増進と食生活の意識改善に取り組むことを検討することを目的とする。

【概要】

都留市食育推進計画の分野別目標である（1）食に関する正しい知識の普及と健全な食習慣を实践（2）食の大切さを理解し感謝の気持ちを育成（3）地産地消の推進と食文化の継承を普及、に基づき、本学学生が市役所や食生活改善推進員の方々にご指導をいただきながら、①大学生向けの減塩・防災料理教室 ②のびのび興譲館クッキング塾での料理教室 ③市内保育園への食育教室等に取り組んでいる。

【2023年度の報告】

コロナ以降、①大学生向けの減塩・防災料理教室 ③市内保育園への食育教室は見送りとなっている。②のびのび興譲館クッキング塾での料理教室は2023年12月に実施されたため、その報告を以下に記載する。

「のびのび興譲館クッキング塾」の参加

日 時：2023年12月2日（土）、12月16日（土）

場 所：都留文科大学 調理実習室

対 象：塾生（都留市内小学4～6年生）

参加人数：計29名（小学生各回20名、本学学生7名、市役所2名）

内 容：「のびのび興譲館クッキング塾」は、市教育委員会主催の小学生を対象とした料理教室である。毎月1回、主に食生活改善推進員の方や調理師の方を講師として招き、様々な調理を経験することができるため、小学生に人気の教室となっている。活動内容としては、単に調理の技術や知識を伝えるだけでなく、地元都留市で作られている作物を知ることや、昔からの食文化に触れることなど、多くの食経験を取り入れている。これらの経験を通して、生きていく上で最も基本となる「食」について、子どものうちから関心を深め、生涯に渡り健康で豊かな食生活を実践できる人間を育てることを目標としている。

この主旨を踏まえ、年間活動計画のうち、第7回と第8回目を生活環境科学系ゼミ生が担当した。内容は、郷土料理を作ってみようという実習で、今年度は第7回に茨城県の郷土料理である栗御飯、巻糰子、パイタ焼きを、第8回に愛媛県の郷土料理であるたこ飯、石花汁、今治焼鳥、醤油餅を調理した。小学生にとっては馴染みがない料理が多く、また普段の活動場所とは違う慣れない調理実習室だったことから、普段以上に緊張した様子であったが、大学生との

コミュニケーションの中で打ち解け、穏やかに楽しんで実習を体験することが出来た様子であった。

＜今年度の予定＞

今年度は、のびのび興譲館クッキング塾と新たに宝保育所での表現活動の取り組みに参加させていただく予定となっている。今年度も貴重な市内の未就学児童や小学生との皆さんとの交流を通じて、教員を目指す学生達にとっても新たな学びに繋がっていくことを期待したいと考えている。

(文責：平和香子)

V-2. 「こどもフィールド・ノート」

【目的】

子ども達が自らの住んでいる地域を再発見することをめざしてフィールドに出て探索・調査する活動、そして、その中で見、聴き、感じ、考えたことを〈ことば〉で表現する活動を、都留市内の小学校において組織することをめざす。

そして、これらの探究・表現活動を通して生まれた子ども達のレポートや観察記録、日記や詩、作文、エッセイ、絵画などの作品は、地域文集『こどもフィールド・ノート』としてまとめ、市内の小学校に向けて刊行する。この文集の作成は、都留という地域のもつ魅力や価値、抱えている問題、さらには地域の現在・過去・未来について、教室や学校、学年、世代を超えて語り合うことのできる広場（アゴラ）を拓くことを目的にしている。

【概要】

協力研究員である北浦の勤務校である宝小学校の生活科・総合的な学習の時間において、子ども達が、地域の〈もの・人・こと〉と出会うことの中で発展していく探究的な学習活動を展開する。

また、地域を舞台とした学習活動を通して見、聴き、感じ、考えたことや発見したことなどを表現した作品（ワークシートやレポート、詩、作文など）を文集『こどもフィールド・ノート』にまとめ、刊行する。

【2023 年度の報告】

本プロジェクトの協力研究員である北浦の勤務校である宝小学校の生活科・総合的な学習の時間において、地域の〈もの・人・こと〉と出会う探究的な学習活動を試みた。

3年生では、かつて宝地区の経済を支えた「お蚕様」を育てる活動を取り入れることで、子ども達の「なぜ」や「ふしぎ」から発展する探究的な活動を試みた。4年生では、西桂町で織物工場を営んでいる武藤英之さんとの出会いの中で、織物工場見学が実現し、子ども達は、織物の現場で見、感じ、考えたことをリーフレットにまとめた。6年生では、地域を流れる大幡川に自然観察を行った際の「今度、川のゴミ拾いをしたいです」というある子の発言を出発点として、学習活動が川の清掃活動へと発展していった。

こうした、地域を舞台とした探究活動を通して見、聴き、感じ、考えたことや発見したことなどを子ども達が表現したリーフレットや観察カード、ワークシート、レポート、詩、作文などの作品を、文集『こどもフィールド・ノート』として編纂し、刊行した。

なお、本プロジェクトの様子については、地域交流研究センターが発行している『フィールド・ミュージアム研究』第二号で、実践レポートとして発表している。

＜2024 年度の予定＞

都留市内の教員数名の協力を得ながら、複数校で探究活動が展開できるようプロジェクトを拡張していく。文集『こどもフィールド・ノート』についても同様に、複数校の子ども達の〈ことば〉が掲載できるよう計画する。

（文責：北浦貴之）

付) 2023 年度 (令和 5 年度) 地域交流研究センター担当教員

鈴木 健大	地域社会学科教授	地域交流研究センター長 まちづくり研究部門担当
北垣 憲仁	地域交流研究センター教授	地域交流研究センター副センター長 自然共生研究部門担当
別宮有紀子	学校教育学科教授	自然共生研究部門担当
内山美恵子	学校教育学科教授	自然共生研究部門担当
福島 万紀	地域社会学科准教授	自然共生研究部門担当
山森 美穂	学校教育学科教授	自然共生研究部門担当
日向 良和	共通教育センター教授	共通教育研究部門 (地域情報教育) 担当
吉岡 卓	学校教育学科准教授	共通教育研究部門 (地域情報教育) 担当
野中 潤	国文学科教授	共通教育研究部門 (地域情報教育) 担当
青木 宏希	地域交流研究センター特任教授	共生教育研究部門 (地域美術教育) 担当
山本 直紀	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 (地域美術教育) 担当
堤 英俊	学校教育学科准教授	共生教育研究部門 (地域インクルーシブ教育) 担当
佐藤比呂二	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 (地域インクルーシブ教育) 担当
山本 剛	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 (地域インクルーシブ教育) 担当
平 和香子	学校教育学科准教授	共生教育研究部門 (社会教育) 担当
邊見 信	学校教育学科講師	共生教育研究部門 (社会教育) 担当
富永 貴公	地域社会学科准教授	共生教育研究部門 (社会教育) 担当
吉田 恵理	国文学科准教授	共生教育研究部門 (社会教育) 担当
佐野 夢加	地域交流研究センター特任講師	共生教育研究部門 (社会教育) 担当
原 和久	国際教育学科教授	グローバル交流研究部門
事務局: 谷内正美 杉本涼 渡部美由紀 小林泰憲 松本菜々香 (まちづくり交流センター・サテライト)		

2023 年度 (令和 5 年度) 地域交流研究センター運営委員会委員

吉岡 卓 広報委員長
堤 英俊 学校教育学科
加藤 浩司 国文学科
OLAGBOYEGA, Kolawole Waziri 英文学科
鈴木 健大 地域社会学科
上野 貴彦 比較文化学科
原 和久 国際教育学科
小澤 初美 経営企画課長
久保田国雄 市民代表 (まちづくり市民活動支援センター長)

2024年10月30日 発行

編集者 都留文科大学地域交流研究センター

発行者 都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
電話 0554-43-4341 (代)

印刷所 株式会社 佐野印刷
〒402-0052 山梨県都留市中央 2-7-3
電話 0554-43-1611
